建築ト社會

第六輯　第九号



忍び寄る秋

大正十二年九月一日

日本建築協會

日本建築協會會則

第一條　本會ノ目的ハ我國建築界ノ堅實ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條　本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條　本會ハ專務所ヲ大阪市ニ置ク

地方ニ支會ヲ設クルコトヲ得

第四條　本會ハ人格、學識、經驗アル建築家ヲ以テ會員トス

會員ノ氏名住所ハ會員名簿ニ之ヲ記錄ス

會員タラムト希望スル者ハ會員五名以上ノ紹介ヲ以テ入會希望書及履歷書ヲ本會ニ提出スヘシ其諾否ハ理事會ニ於テ議決ス

第五條　本會ハ其目的ヲ贊成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員トス

贊助員ヲ分チテ左ノ四種トス

一　名譽贊助員―地位又ハ學識アル名望家

二　終身贊助員―金參百圓以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會ニ寄附スル篤志家

三　普通贊助員―建築ニ關係スル特種ノ技術家又ハ事業家

四　特別贊助員―建築ニ關係又ハ趣味ヲ有スル者

贊助員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各贊助員名簿ニ之ヲ記錄ス

第六條　名譽贊助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會之ヲ推薦ス

終身贊助員タラムトスル者ハ會員貳名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及寄附ノ金額又ハ物件ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

特別贊助員タラムトスル者ハ會員二名以上ノ紹介ヲ以テ申込書及履歷書ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

普通贊助員タラムト欲スル者ハ會員ノ紹介ヲ以テ申込書ヲ本會ニ提出スベシ其諾否ハ理事會之ヲ議決ス

第七條　會員ハ會內ニ於ケル其言行ニ付會外ニ於テ責ヲ任ゼザルコトヲ得

名譽贊助員ハ本會ノ優過及第十九條ニ基キ相當ノ利得ヲ受ク

終身贊助員、特別贊助員及普通贊助員ハ第十九條ニ基キ會誌ノ配布其他各相當ノ利得ヲ受ク

第八條　會員ニシテ脫會セムトスル者ハ其旨ヲ本會ニ申込ムベシ

前項ノ規定ハ贊助員ニ之ヲ準用ス

第九條　本會ハ會員ニ左ノ權利ヲ與フ

一　會頭、副會頭、理事長、理事及名譽贊助員ヲ選擧シ又ハ之ニ被選擧ノ權利ヲ有スルコト

二　會務ニ關シ意見ヲ述ヘ又ハ建議ヲ爲スコト

三　會誌ノ配布ヲ受クルコト

四　會誌ニ廣告ヲ掲載スルコト

五　會誌ニ論說、記事、寫眞、圖案等ヲ投稿シ又ハ之ヲ會誌ニ掲載スルコト

六　會誌ノ發刊

七　建築ニ關スル圖書ノ刊行

八　建築ニ關スル講演會ノ開催

九　建築ニ關スル展覽會ノ公開

十　建築ニ關スル視察

十一　建築ニ關スル有志者ノ親睦會

十二　理想的建築ニ關スル計畫

其他建築ニ關スル有益ナル事項

第十條　會員ハ會費年額金拾八圓ヲ本會ニ醵出スベシ

但例會ニ出席シ難キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金貳百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ル

會員タルノ承認ヲ得タル者ハ會金五圓ヲ本會ニ納付スベシ

特別贊助員ハ特別贊助員年額金九圓ヲ、普通贊助員ハ普通贊助員年額金六圓ヲ前納スベシ

但六期以內ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第十一條　本會ノ經費ハ會費入會金寄附金贊助員其他ノ收入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財產ハ理事長之ヲ管理ス

第十二條　本會ノ財產債權債務及毎月ノ收支ハ主計其計算書ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

本會ノ財產債權債務及毎年ノ收支ハ理事會其決算書ヲ作リ翌年一月例會ニ於テ報告ス

第十三條　本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ細則ニ之ヲ定ム

第十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得

第十五條　本會ノ調査研究ノ必要ニ應シ例會ノ決議ニ依リ各部ノ委員長及委員ヲ設ケ各部ニ委員長一名委員若干名ヲ置ク

委員長及委員ハ會員中ヨリ理事會之ヲ指名シ委員長ハ當該委員ノ互選ス

理事會ハ特殊事項ニ關シ會員外ノ專門家ヲ臨託委員ト爲スコトヲ得

第十六條　委員長ハ當該委員會ヲ代表シ委員長事故アルトキハ當該委員會ノ決議ニ依リ委員其職務ヲ代理ス

委員會ノ經過ハ例會ニ於テ之ヲ報告ス

委員會ノ調査研究報告ハ例會ノ決議ヲ經テ本會ノ名ヲ以テ之ヲ發表ス但シ緊急事項ニ付テハ理事會ノ承認ヲ經テ當該委員會ノ名ヲ以テスルコトヲ得

第十七條　本會ハ毎月一回會員ヲ召集シ例會ヲ開キ重要事項ヲ審議シ報告會、談話會、討論會又ハ講演會ヲ催ス但理事會ハ必要ト認ムルトキハ臨時ノ例會ヲ開催スルコトヲ得

例會ニ於ケル議案其他ノ事項ハ理事會之ヲ會員ニ豫告ス但緊急事項ニ付テハ此限ニ在ラズ

第十八條　本會ハ春秋二季大會ヲ擧行ス

第十九條　本會ノ行フ事業左ノ如シ

一　調査研究報告ノ發表

二　建築ニ關スル重要事項ノ議決

三　會誌ノ發刊

四　建築ニ關スル講演會ノ開催

五　建築ニ關スル視察

六　建築ニ關スル展覽會ノ公開

七　建築ニ關スル有志者ノ親睦會

八　理想的建築ニ關スル計畫

九　其他建築ニ關スル有益ナル事項

十　會誌ノ發刊

十一　調査研究報告ノ發表

十二　決議事項ノ實行促進

第二十條　會員ハ會費年額金拾八圓ヲ本會ニ醵出スベシ

但例會ニ出席シ難キ地方ニ在ル會員ノ會費ハ半額トス

一時ニ金貳百圓以上ヲ出ストキハ爾後前項ノ會費ヲ免ル

會員タルノ承認ヲ得タル者ハ會金五圓ヲ本會ニ納付スベシ

特別贊助員ハ特別贊助員年額金九圓ヲ、普通贊助員ハ普通贊助員年額金六圓ヲ前納スベシ

但六期以內ニ之ヲ分納スルコトヲ得

第二十一條　本會ノ經費ハ會費入會金寄附金贊助員其他ノ收入ヲ以テ支辨ス

本會ノ財產ハ理事長之ヲ管理ス

第二十二條　本會ノ財產債權債務及毎月ノ收支ハ主計其計算書ヲ作リ翌月理事會ニ報告ス

本會ノ財產債權債務及毎年ノ收支ハ理事會其決算書ヲ作リ翌年一月例會ニ於テ報告ス

第二十三條　本會及本則ニ關スル詳細ノ事項ハ例會ノ決議ニ依リ細則ニ之ヲ定ム

第二十四條　本則ハ例會ノ決議ニ依リ之ヲ變更スルコトヲ得

第四回講習會開催豫告

本協會は來る十月下旬左記要項により第四回講習會を開催せむとす詳細は本誌十月號に掲載す

大正十二年九月

日本建築協會

會期　自大正十二年十月十八日　至同年十月二十九日　十日間

會場　大阪市立工業學校

科目　一、鐵筋コンクリート構造主要部ノ強度計算法
　　二、鐵骨構造主要部ノ強度計算法

建築工事請負契約書及同規程の頒布

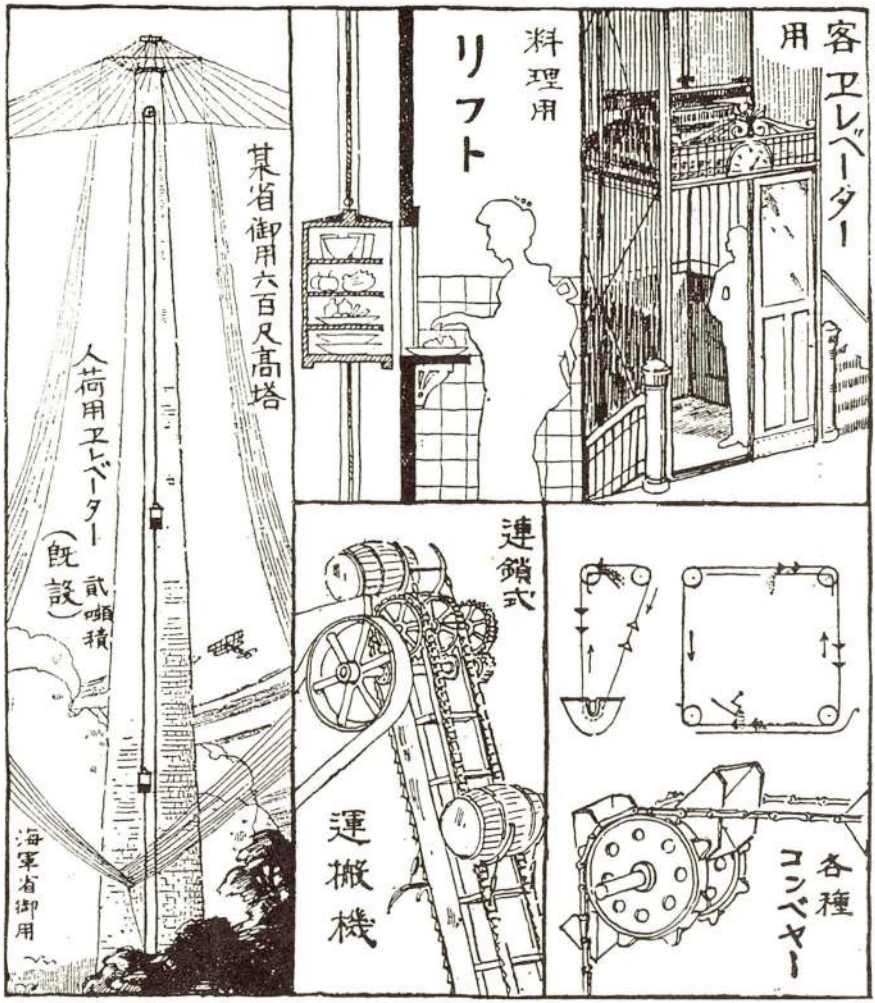
今回日本建築士會に於て建築工事請負契約書及同規程印刷なりまして御入用の方には印刷實費及郵稅共一部に付金貳拾錢にてお頒けするそうです御希望者は同會關西支部（大阪市北區絹笠町大江ビルデイング内）へお申込み被下いまし

大正十二年九月

日本建築協會

本邦エレベーターの権威

（専賣特許六件）



㊥日本エレベータ製造株式會社

本社　大阪市東區中道川西町　電話東三二七六〇八三番

出張所　東京市丸ノ内海上ビルヂング六階　電話丸ノ内二二〇二番

◎製品營業

エレベーター、コンベヤー。エスカレーター其他

捲揚機械設計製作

リフト、ケーブルカー、ホイスト



建築と

第六輯

口絵

○ハンガリーブダペスト市の建築家ドクトルピカン氏設計の住家（最も神秘傾向を帶びたるデザインを視よ）

○伊太利國ピテルボ州アレキサンドロ街の中世紀の住宅（奈何にも間の抜けたるが如くして暢達氣分に富めるデザインを視よ

〔巻頭〕

□物的運動と藝術 ……

〔論說〕

□超過渡期 …… 工學士 横濱勉 …

□アパートメントハウスに就いて 工學博士 武田五一 …

□忘れられたる住宅の半面 …… 農學士 大屋靈城 …

〔研究〕

□所謂大谷石の庇に對する私の見た帝國ホテルの感じ …… 村野藤吾 …

〔住宅〕

□千里山の新い邑より …… 郊邨 …

═土地住宅會社行脚（A）═



會社

第九號目次

〔都　市〕

□紐育の脅威されたる建築界……一記者・四二

〔資　料〕

□「るくそる」から「さつから」の一日　工學博士・八戸成蟲樓・四八
　——埃及旅行記の二——

〔講　演〕

◆淨化裝置に就て（二）……工學士　米元　晉一・五七

〔漫　錄〕

□古寺巡禮・（其一）……池田谷久吉　六四

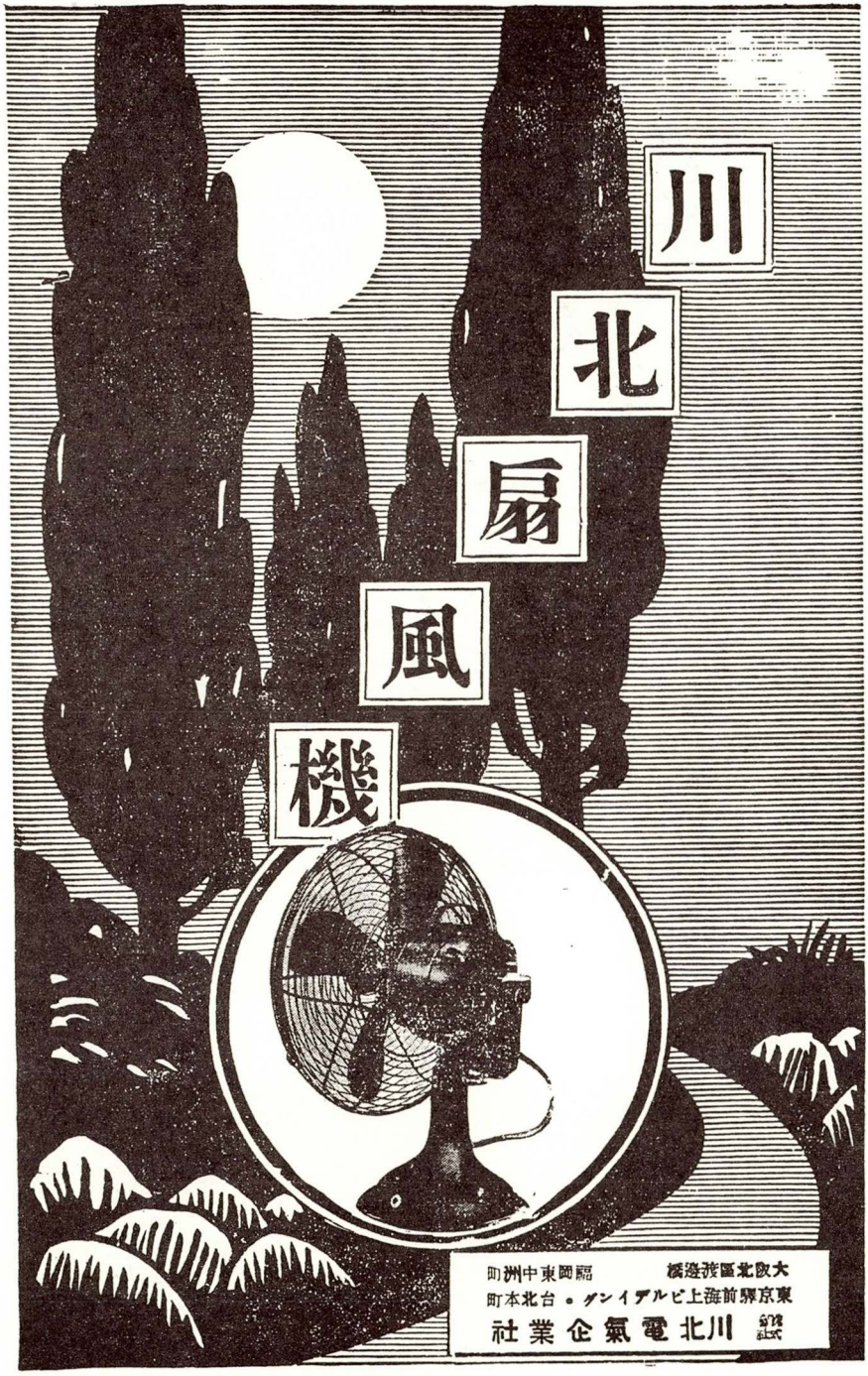
◆滿鮮紀行（三）……波江　悌夫　七

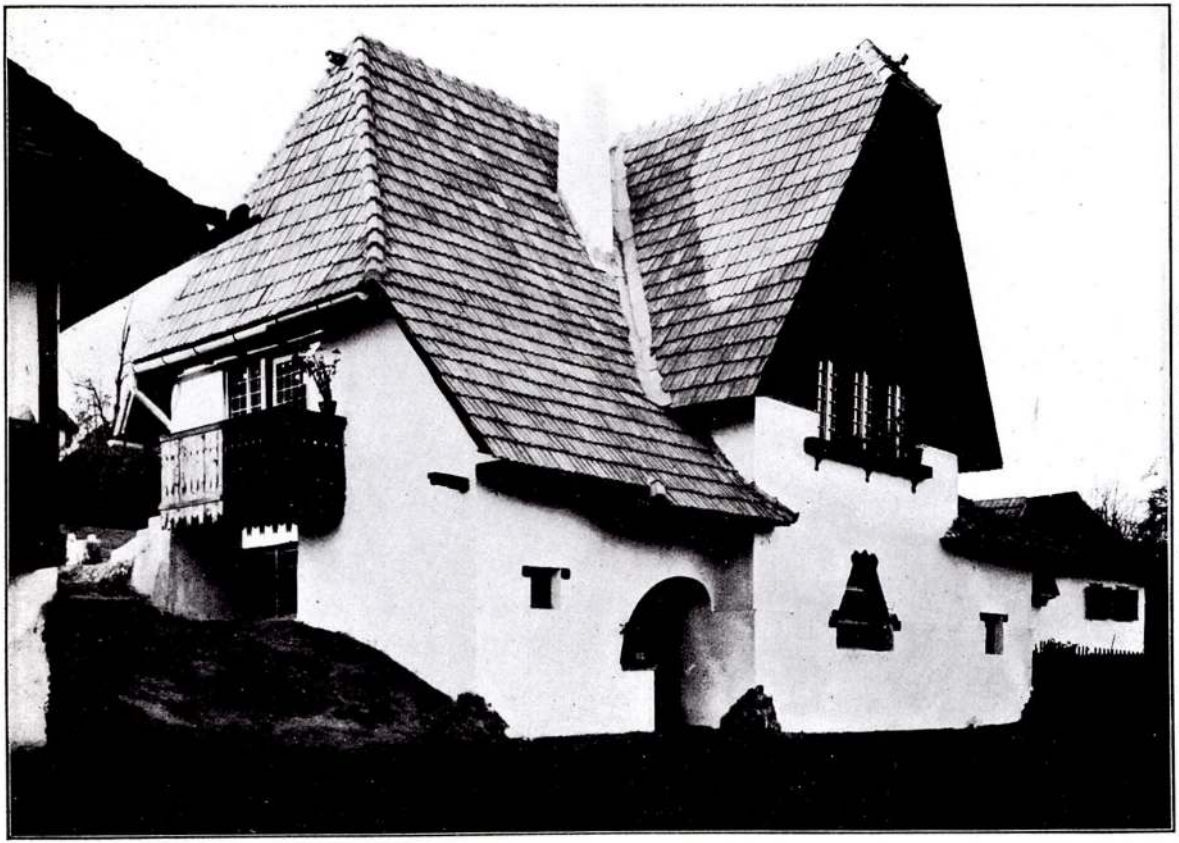
□涼しい「暑い」講演を聞いて……家族の一人・七四

□葉月の追憶……忘而草　七六

〔會　報〕

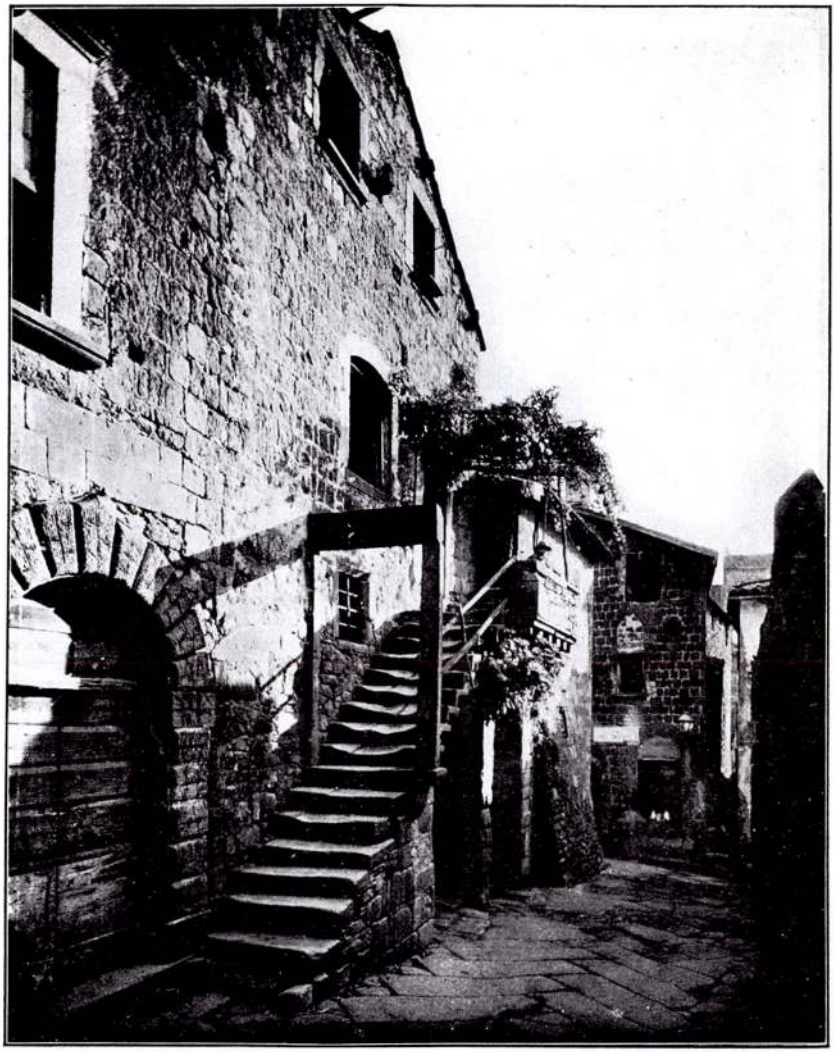
◆日本建築協會八月中記事


川北扇風機
大阪北區菱邊橋
東京驛前海上ビルデイング・台北本町
町洲中東岡扇
社業企氣電北川



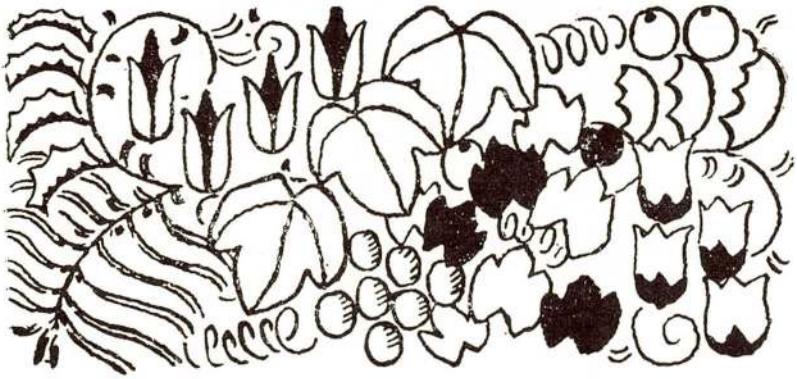
ハンガリー國ブタペスト市の建築家ドクトルビカン氏設計の住家

ドクトル、ビガン氏はブダペスト市に居住し、專ら住家の設計に從事し、合間に印象的の詩も作り、スケッチも畫き農民藝術に大に趣味を有つ有名な建築家であるが、氏は持論としてハンガリーは農民國で古來特色のある農家に富む、故に徒に佛獨風の建築を眞似ずに、其國の有つ特有の形式から進んで住家の意匠を探らねはならぬと云ふておる、即ち寫眞の住家は其一例である。（斯の原圖は我協會會員古宇田實氏の將來されたるもの）



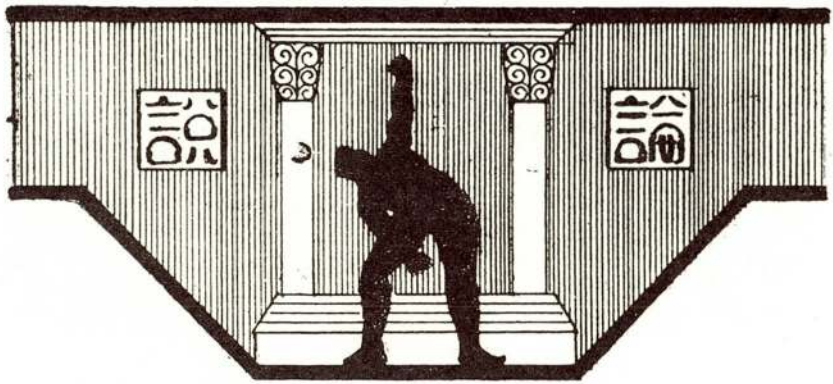
伊太利國ビルテボルロドンサキレア町の街中の紀世中の住宅

の人美ど水噴きし美』、て街市小ぬら足もに萬二民住 、哩五十二北の市馬羅は町ボルテビ建もりよれそし併 、た評定ものい咁の酒 、どのい良の水又 、がるおてれら知てしど『町殘數多合割が家町の紀世中ど殿宮 、院寺の代時クツシゴ 、クスネマロ 、はてりどに家築どたし愛を處斯もロゼンラケミ才天大ばれさ 、い白面に常非が處む富に趣書 、な靜 、り二で家住一の街ロドンサキレアるあに部南の町の斯は眞寫 、るれは思ど然當極至がく聞に段中其てしそ 、るおて來出が入出に接直てりよに段階石らか街 、りなど居住が上以階れそ及どこるせ出り造を台露の石に段中はく若段上ど戸木たへ構て以を楯石 、位方の石おてつ遺數多がのもの種の斯はに街の紀世中 、るあで色特がひ扱の部細るおてい附に等るな麗壯大宏の式の斯にるす要も段階 、口入のらか庭中の宮オキツベの市スンレロフるるおてつ扱を部一の殿宮く白面て似眞を式其もど獨 、佛世後 、る來出がどこる見どのも（のもるたれさ來將の氏實田宇古員會會協我は圖原の斯）。るあがどこるす見散屢をのも



物的運動と藝術

物理學の論ずるが如くんば、力の平均の破れたる場合に、物即ち動く而て平均の回復せらるゝ迄其運動は繼續すと、人間の身體的運動も、亦單に之を外的に見るならんには、他の物的運動と何等の相違あることなし、只身體といふ内部構造の複雜なるだけに、其運動形式も亦複雜なるに過ぎず、即ち、程度上の差あるのみ。然れども、既に藝術品を創作する働を有するものとして見たる場合の人間の運動は、最早程度上の差にあらずして、質を異にす。即ち、直接の生活を一歩離れて、外的のものを單に其儘に受取り、直ちに其れに反應して以て、内外力の不平均を回復するのみにあらず、平均と調和とを「我」の内に企圖し計畫して後の反應となるが故に、外的のものは、最早單なる外的のものにあらずして、少くとも「我」に由りてのものとなる。斯くて、人間一般には、既に赤裸々なる外界なるものは存在せず、斯るものゝ存在を考ふるは、要するに抽象的思考による。而して斯る内面の働としてのものゝ内にて、抽象的なる概念を以てする調和は、一般に學問と呼ばるゝ所のもの、觀念を以てするものは哲學一般なり。茲に、初めて理想なるものあり、價値あり、眞善界の標準を要求する所の人的活動を顯示し來る。而して其内、藝術は直觀といふ形式内の調和方法なりと云ふを得ん。(「行の哲學」)



超過渡期

工學士 横濱 勉

明治大正の時代、言葉を換へて云はゞ、歐米の文化が我國の文化に影響を及ぼして以來、時を經ること正に五十有餘年である　五十年の時間は申す迄もなく一世紀の半分である。此半世期の歳月、五十年の時間之を我二千五百有餘年の長い歴史から考へるならば、時其ものを絶對と考へて、必ずしも長い時間でないだらうと思ふ、併しながら此五十年即ち半世紀の時間を相對的に時其ものゝ價値から考へたならば、今日の五十年は鎌倉時代或は足利時代と云ふやうな昔の五十年とは自から雲泥の差があるのである。私共は今日まで常に明治時代から大正の初期、之を日本文化の過渡期であると稱へて居つたのである、諸君も亦さう言ふて居られたでらうと思ふ、併ながら過去五十年の時間を過渡期として、今日も猶過渡期の爲に暮すのは餘りに長い間であると私は思ふのである。而して、實際今日の事情は既に過渡期を超越しつゝあるのである、即ち現代の我國に於いては政治上に於ても、經濟上に於ても、將又學術文藝の方面に於ても、又之を他方面から考へて、軍備、產業の方面に於ても或は思想問題、或は社會的施設、或は社會運動と云ふやうに、各種各樣

の問題が矢繼早に起つてきて、而も相當に進展しつゝあるのである。殊に數年前の歐洲大戰以來萬般の文化は益々國際的になつて、我日本に於ても有らゆる方面の文化が整頓し、且堅固に進みつゝあるのである。過去五十年の間、即ち私の申上げる過渡期に於いては我國の文化は先進歐米各國の移入文化であり、模倣文化であつた。言葉を變へて云ふならば、追從文化である。それを以て今日まで甘んじて居つたのであるが、今日では既に斯の如き追從文化、模倣文化を容すべき時ではないのである。今日は此移入したる所の文化を更に洗練して、さうして來るべき黃金時代——黃金時代と云ふのは成金時代ではない、誤解されては困るが、來るべき圓滿なる文化時代に今日は既に一步を踏入れつゝあるのである。而して我々の理想としては、一步又一步其黃金時代に這入つて行かなければならぬと思ふのである。即ち私は他の方面の事は姑くおき、茲に我建築界に付て所謂超過渡期であると云ふことを申述べて見たいと思ふのである。

今までの我建築界を觀たならば、なか〳〵歐米の建築に追付かぬ點は隨分あつたのである。併しながら今日では決してさうでないと私は思ふ。之を一々の部類に分けてお話することが極めて便宜であると考へるから、分類して云ふ事とするが、先づ建築の敎育の方面である。

是は今日では學校の程度に高低はあるが、各々其設備に於ても、敎師の質、敎授の方法等は決して先進の歐米各國に劣るものでないと私は思ふのである。而して立派な技術者、立派な徒弟、立派な職工が我國自體に於て澤山養成されてきてゐるのである。

次に建築藝術、建築美術の方面であるが、美術的價値としては日本の建築は在來と雖歐米の建築美術と比較して、決して遜色はなかつたのである。但し在來の日本に於いては、御承知の通り木造建築のみであつたが故に、構造の變はつた建築に對しては餘り進步を見なかつたのであるけれども、今日に於ては、早く申せば、西洋風の美術方面に於いても決して西洋の建築家がやるものと比較して、敢て遜色し

ない程度までに進んで居るのである。技術に於ても同樣である。

次に建築の材料である。昔は木材しか使つて居なかつたのであるが、過去五十年の間に於て色々な材料が出來るやうになつた。鐵材でも、セメントでも、煉瓦でも、殆ど外國で出來るものは、皆我國でも出來るやうになつたのである。其外直接材料としないでも『リノリユーム』とか、『アスフワルト』とか云ふやうなものも內地でも立派に出來るやうになつた。

更に建築の構造に付て云ふと、材料の進歩に伴つて、鐵骨構造や煉瓦造は勿論のこと、鐵筋混凝土でも、歐米先進國に於いては過去及び現在に成功して居る所のものは總て我國に於ても出來るやうになつてゐる。尙ほ學理的の構造の研究に於いても我國の技術者は決して外國の專門家に劣る所はないのである、又其附帶工事に於いても家具裝飾、或は暖房、給水、排水、其他電氣瓦斯等の各裝置、或は庭園の造り方、何れも相當に發達してゐて、是亦歐米各國の其ものに何等の遜色はないのである。

次に建築に關する法規であるが、是は最近大正八年に都市計畫法、市街地建築物法と云ふものが實施されたが、歐米の都市に於て實施してゐる其最も適切なる所を採用して造つたのである　殊に建築監督官と云ふものが置かれて、以前のやうな不仕鱈な建築をすると云ふやうなことは國家が制限するやうになつたのである。

次に建築營業である。昔は御承知の通り、大工の棟梁は設計もし、請負もし、施工もしたのであるが今日は建築に關する技術が多種多樣に亘つた結果、左樣なことは容さぬことになつた。即ち建築士と云ふ職業と、建築請負業、建築材料商、更に又建築の副請負業と云ふものが明に區分されてきたのである建築士と云ふのは、即ち皆樣が希望さるゝやうに建築其ものを設計し、さうして其施工を監督するのである、建築請負業は其建築士が設計したものを以て施工の義務を負つて、依頼者の求に應ずるのである材料商は其施工に必要な材料を註文者並に請負者に供給する職業である、是は歐米先進國に於いても今

日實際さう云ふ順序に成つて居る、但しこゝに一言云つて置きたいのは、我國に於いては此頃多少變態的進歩、或意味に於ては發達の逆轉であるが、建築請負業者が設計監督を兼業することである、是は即ち今日分業的に進んでおつた、又逆に昔のお出入棟梁のシステムに形の上では還つてくるのであつても私は斯樣な不自然な發達が今日の超過渡期に於て起つてくるのであることは甚だ遺憾とするものである

要するに此超過渡期に於ける建築界を一歩又一歩黄金時代に到着させやうと云ふのには、建築家それ自身の覺醒努力は勿論のことであるが、建築をやると云ふ依頼者の覺醒に俟つこと大なるものがあるのである。今日の建築家、建築關係者が現代も猶且過渡時代であると云ふ考へを以つて、將來の黄金時代は默つて居つても來るものだと云ふやうに考て、夢を見ながら眠つて居つては、何時まで經つても、黄金時代は來るものでないのである、既に黄金時代は前にも述べた通りもう來つゝあるのであるが、我々はそれを捉へるべく努力しなければならないのである。我々建築家は共に此建築の黄金時代を大成する爲に今日から努力することを期待するものである。

おほかたにもの思ふとしもなかりけり

只わがための秋の夕暮

アパートメントハウスに就いて

工學博士　武田五一

一

近い過去二三十年の間に全世界に於て色々の發明が澤山ありました、交通機關に於ては飛行機の發達があり、又自動車の發達があり、或は又照明に於ては電燈などが非常な發達を遂げて居ります、又機械に於ても『リノタイプ』であるとか『タービン』であるとか、曾て無い革命的な大發明が色々出來て居ります、此二三十年間は確に世界での總ての發明界に於ける大革命期であつたのであります。

所が建築に於てはどうでありますか、建築に於ても矢張り此三十年間に於て非常なる大變化が行はれて居るのでありまして、それは何であるかと云ふと、約り住宅の發達と云ふことがそれであります。住宅なるものは人類が初めて世の中に出て以來ズツとあつたものでありますが、住宅の最後のもの、即ち最終の人智を極めた所の住宅と云ふものは『アパートメント、ハウス』と云ふ名に依て現はれるものでありまして、苟くも文化都市と名の付く所には何處にもあります、倫敦、巴里、紐育　市俄古其他維納、伯林有らゆる文化都市には『アパートメント、ハウス』と云ふものはありますが、所に依て名前は違つて居ります、或は『フラット』と云ふて見たり、或は日本では文化住宅と云つて見たり、種々な名前を付けて居りますが、結局は同じものであります。

それは何であるかと云ふと、所謂『アパートメント、ハウス』なるものは住宅と云ふものを成べく小さく、最後の、最終の小さい形に纏めてしまつて、而も有らゆる住宅の利便をそれに與へて、住む人をして何等不自由のないやうにしやうと云ふのが其目的であります。それで昔は此『アパートメント、ハウス』は貧乏人の棟割長屋、或は合長屋のやうな種類のものであるとして、非常に人が卑んで居つた、又それに入るやうな人は矢張り中流以下の人々に限られて居つたやうに見られて居ります。所が近來の都市と云ふものは御承知の通り段々人口が稠密になつて參ります、其年と人口の殖えることは驚くべきものでありまして、所謂倍加率を以て都市に人口が集中して來ます、然るに都市に人口が集中するに從て、其都市の文化的設備と云ふものもそれに伴つて行かなければならぬ、へば水道と云ひ、交通機關と云ひ、其他電氣設備と云ひ、悉くのものがそれに伴れて大規模になつて行かなければなりませぬし、又それに伴れて、人間の、何と申しますか、所謂欲求と云ふものが、日に月に盛になつて來ます、昔は行燈の光で以て針仕事をして、それで滿足して居つたものが、今日では八疊の室で以て五十燭の燈りを點けなければ、どうも勉強が出來ないと云ふ風な工合に、總てのことに向つて段々と其欲求が熾になつて參ります、それで人間の欲求は熾になり、都市の人口は稠密する、之を完全に解決するのには、どうしても此住宅に於て何等かの新工夫を凝さなければ、到底其完全な解決は付かないのであります、それに付て、所謂文明都市、文化都市の人々は色々な方法を以て住宅の改良と云ふことをやつて居ります。例へば文化住宅と云つて、此頃頻に日本でも試みて居るものは、詰りそれの一つの現れに過ぎないのであります、即ち僅な面積に於て有らゆる便利を備へて、十分なる愉快を得たい、さうして昔の人が有つて居つた以上の住宅の總ての便利を備へたいと云ふことが、詰り文化住宅の目的とする所でありますがそれと同時に又成るべく便利な都會の中心地に於て、さう云ふ住宅を得たいと云ふことが總ての人の考へる所であります　又近代の人、殊に都會人は衆と共に樂み、一緒に生活すると云ふことに對して、段

々と訓練を經て來て居ります、昔は各々大きな住宅を構へ、所謂門を固くし、塀を高くして、紳士らしくして住つて居りましたが、近頃はさうでない、所謂民衆生活と云ふものが段々と盛になつて來ましてさう〳〵塀を高くし、門を固くして引込んで居なくても、暮せるやうな工合に人間が訓練されて參りました、それに又色々科學的の工夫が凝されて來まして、冬でも寒くないやうに、夏でも暑くないやうに夜でも暗くないやうに、有らゆる天然力を調和するやうな工夫を住宅建築の上に加へられて來ました、所が此科學的の工夫を住宅の上に加へました自然の結果として住宅の價を高くし、經費を多くしました、昔は所謂竹の柱に萱の屋根と云つたやうな家で、安く住へましたが、此頃の完備した住宅に這入らうとすれば、到底昔の人が住つて居つたやうな簡單な譯にいかない、矢張り暖房裝置や照明の設備などをすると、なか〳〵安い金で出來ない、近頃の人は收入も殖えて居ますけれども、支出は收入の增加以上に餘計要ります、そこでそれ等のものを完備して、安くしやうと云ふのには、從來のやり方ではいかない即ち有らゆる建築上の設備を共通的に使用することに依て初て安くさう云ふものを使ふことが出來る。然らばさう云ふものを共通的に使ふと云ふにはどうしたら可いかと云ふと、詰り大きな家を拵えて、共通なる暖房裝置、共通なる給水裝置、共通なる照明裝置を施し、さうして『エレベーター』と云ふやうなものと設けて、差支のない限り成べく共通的に住宅を完全にするのが、是が所謂近代都市の生活に對する解決法であります、即ちそれ等の解決をするには『アパートメント、ハウス』と云ふものを造らなければ、解決が出來ませぬ。

二

『アパートメント、ハウス』の利便はどう云ふことがあるかと云ふと、先にお話したやうに『第一には暖房裝置で、之に依て冬の眞盛りと雖、春の如き溫度を室內に保つことが出來る、是は理想とする所で

ありますが、是も相當の經費が要ります、其他『エレベーター』だとか色々ありますが、又今日の我々が最も困らんとするものは婢僕の問題であります、下女下男を得ることがなか〳〵困難になつて參りました。それは富豪の方々ならば何でもないことかも知れませぬが、中流社會の人々が女中を得ることは今日はなか〳〵困難であります、そこで下女下男と云ふものも共通にすれば、是も一つの解決方法になるのでありまして、それ等も『アパートメント、ハウス』の利益の一つであります、又電話の如きにしても、是は無論自分が一つ有ち得る人に可しいが、有ち得ない人は是が何か共通の方法を以て使用することが電話の利便を增す所以であります、それから最も困る問題は汚物の排泄問題であります、例へば便所の掃除、其後始末で、殊に都市が今日の如く段々大きくなつて來ますと、非常に面倒なことになります、東京市の如きも百姓が自分の家を出て東京の眞中まで來ますのには、どうしても泊りがけでなければ來られないさうであります、まさか肥桶を電車に載せて來る譯にもいかない、どうしても是は擔いで來るか、輓つ張つて來るかしなければならぬ、それが練馬の在から東京の眞中に來るのにはどうしても泊りがけださうであります、大阪でも聽てさう云ふ形勢になりつゝありますが、是等のものは肥桶に汲まずに、何か處分の方法を別に講究しなければならぬ、其方法は學問的には解決されて居ますが、それにはな〳〵かの金が要る、安い經費で出來ぬ、それを若し皆共通的にやつたならば出來ます、所謂『アパートメント、ハウス』ならば、隨分さう云ふことは解決が出來る、又瓦斯の如きも矢張りさうでありまして、家々に各々瓦斯を裝置すると云ふことは相當經費が要ります、所が共通の配管裝置をやりましたならば、それが餘程安く上るに、一體是等の所謂文化的設備を住宅に應用いたします時には、住宅の經費の少くとも百分の二位はさう云ふ經費に取られてしまひます、所が其百分の二取られる所の經費をそれで一軒で負擔するよりは、十軒で負擔する方が安くなりますし、又それを百軒で負擔すれば、一層安くなる譯であります、それで若し一軒の家に一家族住む代りに、十家族住めば、それだけ經費が安く

なり、又一軒の家に百家族住むことが出來れば、尙ほ以上に經濟的に出來る譯であります。

それで近來の『アパートメント、ハウス』の一番進歩したものを調べて見ますと、唯今では亞米利加の紐育と市俄古に『アパートメント、ハウス』の一番立派なものがある切りでありますが、市俄古に於ける『アパートメント、ハウス』の如きは社會の最上級の所謂富豪が住んで居りまして、一屋の中に百十九の家族を入れるやうな立派な『アパートメント、ハウス』が出來て居ります、詰り百十九の家族で『エレベーター』なら二つなり、三つたりの『エレベーター』を共有すると云ふことになるのでありまして、日常の經費が非常に安くて濟む譯になります、それで近來我國でも大分さう云ふ風な問題に付て困難を感へられて居ることが新聞などにも見えて居りますが、若し此『アパートメント、ハウス』の完全なものが出來さへすれば、それ等のものは忽ち解決されるであらうと思ひます。

三

又近來都會地附近に於て郊外住宅と云ふことを頻に高唱される傾向が見えます、是は唯單に日本ばかりでありませぬ、諸外國でも皆やつて居りますが、實は諸外國よりは日本の方が郊外住宅の建築は盛であります、殊に東京及び大阪の附近に於ては郊外住宅のなか〳〵盛に出來ます、而も其郊外住宅も相當立派な階級の郊外住宅が出來ますが、此郊外住宅の出來ると云ふことは扨て是が『アパートメント、ハウス』となるべき階段であります、それは此郊外住宅と云ふものが市内住宅と其便利の點に於てその位の違ひがあるかと考へて見ますと、其次の時代には郊外住宅は『アパートメント、ハウス』になるべきものであると云ふことが明に分るのであります。

一體郊外住宅が今日のやうに盛になつて、市内に家を造らずして、郊外に家を建てると云ふことの原因はどう云ふ所に存するかと考へて見ますと、之には先づ五つばかりの原因があるやうに思はれます。

第一市街地に於ては地價が餘りに高くなり過ぎた爲に住宅を造るには少し勿體ない、それよりはもつと金の儲かる建物を都會には拵えて、金の儲からない建物は郊外に建てる方が可いと云ふ考が起つたことでありまする、第二は市街地は空氣が惡い、總ての點に於て不衛生である――一つの迷信とでも云ひますが、さう云つたやうな考が大分皆樣にもある、所が今日では市街地と云ふものはそんな不衛生なものでないのでありまする、無論市街地にも貧民窟のやうな所は不衛生でありますが、相當なる市街地はそんなに不衛生でないのに拘らず、市街地は不衛生であると云ふ一つの迷信がありまする、それが爲に郊外に去て住宅を造ると云ふ傾向がありまする、第三には自分で家を造らない人でも、市街地には借家するにしても殆ど家がない、少しく借家らしい借家は皆人が這入つて居つて、新來者に對しては借家と云ふものが到底手に這入らない、止むを得ずして不完全ながら郊外に住宅を求めやうと云ふのが第三の原因でありまする、又住宅に對する所の一般の理解が大分高まつて參りまして、大抵の方々が住宅と云ふものに對して相當の欲望を有たれるやうになりまして　從來のやうな住宅には住まへない、住む以上にはもう些と家らしい家に住まいたいと云ふ、希望が大分皆樣の頭に這入つて來たと云ふのが第四の原因でありませう、詰り從來の家では氣に入らない、それを建て換へるには金が要かる、新しく家を建てるには地面が高い止むを得ず最後の遁路として、田舍へ持て行つて家を造るより外ないと云ふことになるのでありまする、第五の原因としては、郊外住宅は何となしに詩的である、實際の便不便は差措いて、何だか詩的であつて、郊外に住つたら、嘸ぞ面白からうと云ふ一つの憧れでありまする、何と云ひますか、謂はば浮氣な考でありまする、十分に研究せずして、唯郊外に家を造つたならば、嘸ぞ面白いことだらう、歌にも謂ふ竹の柱に萱の屋根で、嘸かし粹なことだらうと思ふて、出掛けて行くのでありますが、兎に角、斯う云ふ原因で出來た所の郊外住宅は總て失敗であります、聽く所に依れば、又私の研究する所に依れば、郊外住宅と云ふものは、非常なる富豪か、然らずんば、非常なる貧乏人か、此兩階級のものには可しい

が、中流階級の者は本當に郊外住宅には住み切れないものだらうと思ひます。是は何故かと云ひますと郊外住宅は總ての點に於て經費が非常に餘計要かります、又病人が出來たやうな場合に應急手當を施すことが困難であります、實際困るのは病氣の場合であります、大抵の場合郊外に住まれた方は、健康の間は可しいが、一人二人大病人が出來ると、閉口して、矢張り市の中に歸つて來なければならぬ運命に遭遇いたします、又郊外住宅の利益としては、天然の鑑賞、天然の美しい草木、山水に近づき親しむと云ふことでありませうが、併し是は何も必ずしも家の直ぐ側に山がなくても、時々山なり公園なりへ出掛けますれば、其慾望は滿足されるのでありまして、朝起きてから寢るまで山水の氣を恣にしなければならぬと云ふ程のものでなからうと思ひます、さうなつて來ると、結局都會の眞中に住宅を拵えて、總ての利便を享有しつゝ完全に生活の出來るやうにするのが、我々の最後の目的とする所とならなければならぬだらうと思ひます、尤も歐米各國に於ても最初の間は頻に郊外住宅が出來ました、倫敦の町外れにも、或は紐育や市俄古の町外れにも、又巴里の町外れにも澤山の郊外住宅は出來ましたけれども、其郊外住宅は結局先にお話しました原因から大抵貧乏人が這入るか、然らずんば非常なる富豪が這入るかで、あとの中等階級の人は市の中に逃げ歸ると云ふやうな狀態になつて居ります、中產階級の人々に付ては、どうしても都會の中にそれ等の人々を容れるべき設備が必要でありまして、其設備が所謂『アパートメント、ハウス』であります。

四

それで此『アパートメント、ハウス』の今日、現在の發達の程度は非常に立派なものが出來て居りまして、其間取の如きも實に巧妙を極めたものであります。一番低いのでも八階位あります、甚しいのは十五六階若くは二十階位の『アパートメント、ハウス』がありますが、其の一つの家に持て來て、少い

のは十家族、多いのになれば、先きにお話したやうに百十九の家族が住つて居ります、結局一階で十家族住むとして、二十階とすれば　二百家族が其屋根の下に住まへる譯であります、而もそれ等が極めて愉快に、有らゆる利便を備へて、決して不自由なく住まへるやうな狀態になつて居ります。

我國に於ける『アパートメント、ハウス』はまださう出來て居りませぬ、東京に於て二つ三つ出來て居ります、大阪にも出來かゝつて居りましたが、世の中の不景氣の爲にそれが形に現はれずに濟んだのであります、兎に角不完全ながら一二のものはありますけれども、是等はまだ〳〵所謂『アパートメント、ハウス』としては論ずべき價値のあるものではないのでありまして、外國で云へば『フレメント、ハウス』と云ふ棟割長屋に屬すべきものであります、それを『アパートメント、ハウス』と呼んで居るのでありますが、私共は決してそんなものを『アパートメント、ハウス』とは言はないのであります、苟くも『アパートメント、ハウス』と云ふ以上は、最上級の生活の出來る程度のものでなければならぬのであります、書生の住つて居るやうな部屋が幾つあつた所で『アパートメント、ハウス』とは云へないのであります。

五

現在『アパートメント、ハウス』の進歩の程度に於て、どの位まで切詰めて居るかと云ひますと、其切詰めを例として一つ此處でお話いたしますが、大抵其建物の中で公共的の場所と致しましては一割以上は取らない、例へば一つの建物が百坪あると致しますと、十坪以上は階段や廊下に使はないことになつて居ります。階段若くは廊下の如きは大抵一割以内に止めて、あとの九割は住む部屋になつて居ります、又一家族の住へる床に於て矢張り一割位を通路と致しまして、アトの九割は住へる部屋になつて居ります、詰り五十坪の『アパートメント、ハウス』があるとすれば、四十五坪までは住へて、あとの五

坪だけが廊下になるか、階段になると云ふことになつて居ります、それ位まで切詰めて、而もそれ等が不自由なく使へると云ふことは、是は所謂建築上の技術でありまして、技術がそれまで進歩して居ると云ふことは確に一つの誇であらうと思ひます。

それで、それ等の『アパートメント、ハウス』の一番立派な例を取つて見ますと、非常に立派な例と云つた所で『アパートメント、ハウス』の一家族に使つて居ります所の廣さは　先づ五十坪以上の所は殆どないのであります、五十坪位の廣さで以て部屋の數が十あります、さうして寢室を二つ三つ有つて居ります、それに完全な風呂場や便所があつて、立派なものであります　一番少ない『アパートメント、ハウス』の單位は十坪、十二坪位のものがあります、十二坪で以て五つの部屋が出來て居ります、それにも寢室から、食堂、臺所、應接間、風呂場、便所と云ふものが付て居りますから、少しも不自由なく住へる、さう云ふものを幾つか集めて、それが一つの大きな建築物になつて居るものが現今の『アパートメント、ハウス』でありまして、其處には共通なる女中があり、共通なる番人があり、共通なる『エレベーター』があり、共通なる暖房裝置があり、共通なる電話裝置があり、又共通なる電燈裝置があつて、而も其中に住んで居るものは各々別々に完全に隔離されてしまふやうなことになつて居ります、斯う云ふ生活に必要な利便は總て備へられて、而て各々互に其秘密が十分保たれて住へると云ふやうな建築が出來ましたならば、今日の都市に於ける混雜の狀態と云ふものは明に解決されてしまふことになるであらうと思ひます。

で、斯樣に完全なものが、若し大阪なり東京なりに出來ましたならば屹度歡迎されるものだらうと思ひますけれども、未ださう云ふものが出來上らないと云ふのは、まだ我國の經濟狀態、富の狀態が其處までいかないのと、又今日の社會狀況がそれ等のものを本當に要求するまでまだ切迫して居らないからだらうと思ひます。まだ餘裕があるのでありまして、晩酌をしつゝ前栽を眺めて、打水の美しいことを

謳歌して居るやうな、悠りした時代であるからでありませうが、併し此悠りしたやうな狀態はもうさう長く續くものではないのでありまして、將來十年、二十年經つたら、そんな暢氣なことを言つて居られないだらうと思ひます、そんな切迫した時代の來ることは望ましいことではないですけれども、其は避け得られないことだらうと思ひます、さう云ふことになつて現れる所の『アパートメント、ハウス』と云ふものを、まだ其出來ない以前に皆樣が多少なりとも御研究になり、或は親んで居られたならば、非常に好都合ぢやないかと思ひまして、茲に斯う云ふ席を利用いたしまして　一寸申上げて見た次第であります。

山のあなたの空遠く
「幸」住むと人のいふ
噫　われひとゝ尋めゆきて
涙さしぐみかへりきぬ
山のあなたのなほ遠く
「幸」住むと人のいふ

忘れられたる住宅の半面

農學士　大屋靈城

皆樣が一日の仕事を了へて、御自分のお宅にお歸りになつた時に、若しも皆樣のお宅の緣側の戸や、窓の戸が閉められてありましたならば、皆樣は必ず目を圓くして皆樣の妻君に向つて、何が爲に戸を閉て居るか、何が爲に窓を閉めて居るかと云ふ詰問を一番眞先に發せられるに違ひないと思ひます、今頃に戸を閉めて、暗くて仕樣がないぢやないか、鬱陶しいぢやないか、不愉快ぢやないか、色々な叱言が必ず出ることだらうと思ひます、是は果して何が故でありませうか、言はずもがな、暗い、風通しが惡い、不愉快だと云ふことでありませう、是は極端な例でありますけれども、我々の住宅と云ふものが單に建築のみを以て完成されて居るものでないと云ふことを語るものであると思ふのであります、建築物の外に尙ほ或ものが其處に加へられて、初て我々の愉快なる住宅となるのだらうと思ふのであります若しも我々の住宅が建築だけを以て出來上つて居るものとしますると、我々は何も好んで此地上に生活する必要はないのであります、地上に家を建てる必要はないと思ひます、地殼に穴を穿けて、床も壁も鐵筋混凝土で張詰めて、其中に疊を敷いて住んで居りましたならば、經濟上から言つても、ぞの位安く付くかも知れぬと思ふのであります、所が此地の中に土鼠のやうに住むと云ふことは原始時代の昔はいざ知らず、唯今では極く「プリミライヴ」な形として其住宅の痕跡を見るに止まるのでありまして實際穴居を以て日常住宅として居る國は殆どないのであります、是と申しますのも、地の下に家を建てゝ住むと云ふことは人間生活をして愉快ならしむるに不適當であると云ふことを我々人間が覺つた結果であります。

建築プラス或もの、其或ものと云ふのは果して何であるかと申しますると、言はずもがな、建築物の周圍を取圍んで居りまする所の空地である、もつと言葉を換へて上品に申しましたならば、庭園でありませう、若しも此庭園、空地がございませぬでしたならば、如何に建物だけは立派に拵え上げましても、一日たりとも我々は其中に愉快に暮すことは出來ないのであります、戸を閉めると云ふことは極端な例でありますが、若しも此公會堂にしました所が、向ふには川があつて、そして遙か向ふに家が建て居るから、此部屋の中に明い光線が這入つて氣持が好いのでありますが、今假に此公會堂の直ぐ隣に一間なり二間なり隔つて　同じやうな建物があると假定しますならば、此公會堂は非常に薄暗い、氣持の惡い、直ぐに頭痛のするやうな、むさくるしい所になつてしまふでありませう、皆樣の住宅に於ても其通りであります、皆樣が住まれて居る所が果して何處であるか能く存じませぬけれども、皆樣の住んで居られる家の緣側か或は窓の直ぐ隣りか向ひに家の壁とか塀とか、或は工場の煉瓦とか云ふやうなものが突立つて居りました場合には皆樣の家はどの位廣い窓を有つて居つたと假定しましても、其窓は戸を閉てたと同じやうに役に立たない薄暗い家になつてしまふだらうと思ふのであります、是から考へますと、我々の住宅は建築物の周圍に必ず相當の庭、相當の空地を取つて置かなければ、眞の住宅となすことは出來ないと云ふことはお解りになるだらうと思ふのであります。

所が御覽なさい、我大阪の市街はどうでありますか、諸君があの三越の一番上に上つて周圍を御覽になりました場合に見えるものは何であるか、唯瓦のみである、瓦の波が、手前の方から向ふの方に打寄せて居るのか、向ふの方から手前の方に打寄せて居るのが、それは皆樣の見る眼に依て感ずる所は違ふでありませうが、どちらにしましても瓦の波であります、此瓦の波は何を我々に語るかと云ふと、我大阪市の住宅が殆ど向ひ兩隣にくつ付いてしまつて、窓はありながら、光線は這入らない、空氣の流通はないと云ふやうな非常に混雜した市街であるといふことを我々に知らしむる一つの「シンボル」であら

うと思ふのであります。

唯今ではどうか知りませぬが、能く話をききますと、大阪の人は、窓を澤山開けると、疊が焼けるといふ、それが爲に大阪の住宅は多くは穴藏のやうに狭い窓がチョボッと開いて居て、晝でも暗い部屋が多いのであります、疊が焼ける——疊と云ふものが若し二年保つものであると假定しました所が、焼けたからと云つて一年位の壽命が縮まるかも知れないが、そんな家に住んで居ては、疊が焼けて、其壽命が一年縮まるよりも、我々の命が縮まるといふことをお氣付きにならなくてはならぬと思ふのであります、狭い薄暗い風通しの悪い、空氣の不潔な所に固つて住んで居る爲に我々が毎年々々どの位の人命を落して居るかと云ふことを考へましたならば、疊の焼ける位の損失は天秤に掛からぬ位の僅なものであると思ふのであります。

我大阪の死亡率は時に依て少しは變りますが、平均千人に付て約二十人あるのであります、世界の各都市と比較して見ましても、殆ど是以上なる都市はないのであります、殊に赤ん坊の死亡率は世界で第一、——其第一も殊に飛び抜けて第一である、生れる者が千人と假定しまして、其中、一番多い所では三百六十八人、一番少い所でも百四十二人の子供が死ぬのであります、茲に二三の例がありますが、此中ノ島附近は大阪で割合に子供の死なゝい所でありまして、千人の出生者に付て死亡者が百四十二人、其次は堀江の方で二百十人、それから九條の方へ行きますと 三百五人、殊に西九條の方は尚ほひどいので、三百六十八人も死ぬのであります 今擧げました三つ四つの數字の中でも一方は百四十二であり一方は三百六十八と云ふ風に二倍以上の差があるのであります、此大阪で割合に乳兒の死亡率の少い中ノ島と、非常に多い西九條或は今宮の方面とどう云ふ風な條件が違ふかと申しますと、色々條件がありませうが、矢張り比較的綾り住んで居るのと、非常にむさくるしく固つて住んで居るのと、是が第一の違ひであらうと思ふのであります、中ノ島附近は綾りして居るのに反して、堀江、今宮、西九條と云ふ

やうな所は非常に混雑して住んで居る、混雑して住むと申しますのは、約り家の周りに庭がなく、家と家とがくつ付いて、而も其家が小さく、其小さい家にウジャ〳〵と澤山の人が住んで居ると云ふことでありませう、殊に唯今擧げました乳兒の死亡率をもう少し詳しく詮じて見ますると、此中の二十五「パーセント」(二割五分)は先天的に弱いものであります、生れながらにして生きて居られぬと云ふ位に弱い子供が二割五分あるのであります、即ち是はお父さんやお母さんが弱い爲に子供は生れながらにして死なむねばならぬ云ふ運命になつて來るのであります、それから肺とか氣管支とか云ふやうな呼吸器の病氣を患つて斃れるものが四十「パーセント」(日割)あります、殊に此呼吸器病で大阪の子供が死にまする狀態は、生れて直ぐ死ぬ者は少くて、生れてから一年位經つてから死ぬ者が多い、是は何が故であるかと云へば、詰り自分の育てゝ居る所が住宅か何かの缺陷があると云ふことになるのでありまして、殊に呼吸器を壞すと云ふことは其住んで居る住宅の空氣が第一汚いと云ふことでありませう、又餘りくつ付て住んで居る爲に、一緒に話をしたり、一緒に寢たり、坐つたりして居る間にさういふ病氣の傳染の機會を多くすると云ふやうなこともあらうと思ひます、斯の如くにして、此大阪に住んで居る人間の子供が斯くも澤山に空しく其命を失つて居るのであります、從令疊は一年位長く保つた所が、子供を奪はれてしまつたならば、決して我々の生活は幸福でないのであります、是から考へますと、我々の住宅は決して建築物のみを以て住宅として滿足して行くことは出來ないのであります。

日本ではまだ餘り統計はございませぬけれども、住宅の周りに緩りと空地を取つて、草花を植えたり木を植えたりして居る所謂田園都市と云ふものが西洋にボツ〳〵行はれて居りますが、其田園都市の人間の死亡率を見ますと、非常に少いのであります、大阪の半分もないのであります、一例を擧げますと「リヴアプール」の近傍にあります所の田園都市では千人に付て僅に八人位の死人しかないのであります、又同じく「バッキングワム」の直ぐ近くにありまする田園都市では千人に付て僅に七人位の死亡者

しかないのであります、詰り半分以上は此住宅改善の爲に助つて居ると云ふことになるのであります、之を見ても、如何に我々が住宅に周圍の空地を必要とするかと云ふことが解るでありませう。

英國の「ドクター、ダラメヤ」は此事に付て少しく詳しく研究しましたが、全く庭の無い所に住んで居る人間と、ホンの一坪でも庭を有つて居る家に住んで居る人間とを統計に取つて調べて見ると、死亡率に十五「パーセント」の差があると云ふことを發表して居ります、詰り全く庭の無い所に住んで居る人間が百人死ぬならば、一寸でも庭の有る所に住んで居る人間は八十五人しか死ないと云ふことであります、此事に付ては我政府も特に注意を致しまして、先年　即ち大正九年九月二十九日に勅令第四百三十八號を以て發布されました市街地建築物法施行令の第四十一條に於て此面積の規定をして、取締をして居ります、其大要を申しますと、「今後住宅として家を建てる場合には少くとも宅地の十分の四だけは――詰り百坪の宅地であれば、四十坪だけは空地として取つて置かなければはらぬ」と云ふ規定を出したのであります、其他商店工場等に付ても規定を出しましたが、此規定は決して是で十分と云ふ譯ではありませぬけれども、其最少限度を初めて要求したのであります、詰り百坪の敷地を有つて居る方はどんな場合でも六十坪しか建物は許さない、アトの四十坪は必ず殘して置かねばならぬと云ふことを規定して居る、是は火事を防ぐと云ふ意味からでもありませうが　第一光線、通風と多少意味から是だけの空地は必ず取つて置けと法律上命令をした譯であります。

我大阪でも此建築物法を適用しまして、既に二年以上になりますが、今日でも尚ほ府廳の建築課に出願して來ます所の住宅建築の願書の一割位は矢張り舊の通り、百坪に對して四十坪の空地を殘さずに建物を建てやうと云ふ出願をして、來る人があるさうであります、是は明に住宅に庭の必要である、空地の必要であると云ふことを忘れられて居る結果であらうと思ひます、まだ例は澤山あります、例へば先逓て遞信省が企てました住宅貯金の勸誘の實例なんかにも　殆ど此制限の範圍を超えて居る例を澤山擧げ

てありまず、あゝ云ふものに、ウッカリ乗つて、住宅を建てやうと思ふて貯金をして居れば、其貯金では將來家が建てられずに、折角貯めた金が何にもならぬやうになるであらうと思ひます、又大阪市で建てました鶴町の住宅の如きも、第一期に建てました分は此建築物法を出した一寸前でありましたので、矢張り空地が足らないのでありまず、諸君が行つて御覽になれば、直ぐ分るやうに、彼處へ行けば、もう一からは蒸し暑くて、あの隧道みたやうな道を通るにも忽びない位であります、まして況や彼處に住んで居られる方は如何に暑いことであらうとお察しする位でありまず、必ずあゝ云ふ所は大阪市の將來の貧民窟となるであらうと思ふのであります。

――尙ほ此頃都市計畫事業の財源として間地稅と云ふやうなものを企てられて居りますけれども、此間地稅の如きも私をして言はしむれば、非常なる惡稅でありまして、斯う云ふ稅をだん〳〵取つて市內にありまず所の靑々とした樹木の植つて居るやうな所を皆無くしてしまふやうになりましたならば、我大阪は益々火宅の巷に陷つてしまふ、都市計畫が却て都市の改惡になつてしまふだらうと思ひます、單に財源々々と申しましても、却つて市街を惡くするやうな財源は成だけ取つて貰はぬ方が宜いと思ひます、私は先年來此大阪で年中樹の蔽ふて居る面積を調べさせましたが大阪市は僅に三「パーセント」(百分の三)しか樹で蔽はれた面積はないのでありまず、所が諸外國の都市は少くとも其全面積の二十乃至三十「パーセント」は樹を以て蔽はれて居る、斯の如く我が都市が空地と云ふことに缺陷を有つて居る今日に於て尙之を段々と狹めて行かうと云ふやうな計畫をするのは甚だ遺憾であると思ふのであります、私は官吏でありまして、餘り斯う云ふことを申しますと、官吏服務規程に反くやうなことがありますから、餘り申しませぬ、唯今申しただけでも少し申し過ぎたかも知れませぬ、どうぞ此場限りにお聽取りを願ひます

――詰り此度と云ふものは我々の住宅に於ては空氣の料理場でありまして、我々が臺所を食物の料理

場として有つて居りますと同じやうに、庭と云ふものを我々が毎秒々々吸つて居る空氣の料理場として有つて居ることが最も必要なことであります、世界の統計で、全く飯を食はずにどれだけ長く生きて居つたかと云ふと、一番長いのは四十八日間生きて居つた、所が空氣を吹はずして一日でも生きて居つた人はない、一時間でも無いだらうと思ふ、我々が毎秒々々吸つて居る其空氣の善い悪いと云ふことは、我々が毎日食ふ米の良否、或は肉を食ふのと、唯鹽で食ふのと、詰り美食と粗食の關係の如く左樣に我々の體に影響をするのであります、然るに今日「ヴイタミン」であるとか、「カロリー」であるとか、食物に付ては有らゆる方向から榮養の良否が研究をされて居りますけれども、空氣が清潔であるか不潔であるかと云ふことに付て誰か研究した者がありますか、研究したものがあつても、一般の人はまだ之を等閑にして、一向頓着しないのであります、諸君は一日中此大阪市を歩いて、家へ歸ると、鼻の孔が眞黑になつて居る、斯の如く汚い榮養價値のない空氣を吸ふて居る爲に皆樣の顏は段々蒼くなつて、靑瓢箪みたやうになつて來るのであります。

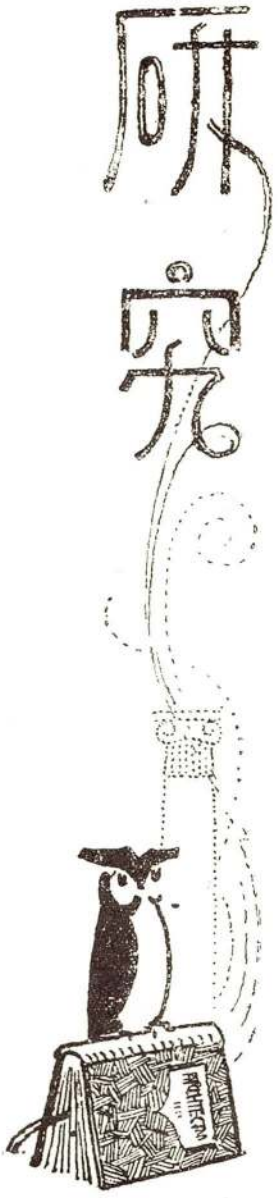
約り庭と云ふものは衛生上から申しますると、太陽の光線を直射する爲に必要なものであります、又一方から申しますると、空氣の貯藏場であります、又如何に空氣を部屋の中に入れましても、其空氣が悪い濁つた不潔な空氣であつたならば、何にもならぬから　其空氣を始終清淨に保つ所の濾過器の如きものであります、決して昔の人が思つて居つたやうに庭と云ふものは贅澤物ではないのであります、今日我々の生活に自分の部屋がなくてはならぬやうに、必ず此庭といふものが少いながらも、僅でも有つて居ないと云ふと、我々は完全なる住宅を贏ち得たと言ふことは出來ないのであります。

唯今申しましたのは庭の衛生上に於ける効果を申上げたのでありますが　子供を遊ばせる唯一の場所であります、小公園なども子供を遊ばせるに宜い場所でありますが、三町か四町歩けば行ける所の子供は小公園に遊びに參りますが、少し遠くなりますと、遊びに行きませぬ、又小公園へ行くやうな子供は

割合に運動をする必要もないやうな惡坊主で、弱い體の青瓢箪は其處へ一日行くと、直ぐに殴られたり、叩かれたりして、泣いて歸る、斯ういふ青瓢箪は必ず自分の家の庭で育てなければ、育てる所がない、我々がそれ〳〵寢室とか、食堂とかを家の中に建てるやうに、子供の爲には屋外に子供の部屋を造つてやらなければならぬと思ひます、屋外の子供の部屋は即ち庭園であります、其庭園は子供の爲には我々の住んで居る部屋と同じものであります。

其他庭と云ふものは我々の勞を慰する爲の唯一の機關でありまして、我々が演說をして、疲れて、家へ歸りまして、お湯に這入つて、涼しい椽側に坐つて、一杯の酒を汲みます時に我々の勞は立所に消えて行くのであります、此庭の我々に與へてくれる慰安と云ふものは先に說きました衛生上の價値以上であります、惜しいことには之に付て尙ほお話をする時間を有ちませぬ、今は此位にして止めて置かうと思ひますが、最後に諸君が今後自分の住宅をお造りになる場合には子供を育てる家にも必ず自分の周圍に庭園を造ると云ふことをお忘れないやうにお願ひして置くのであります。

夜をこめて驅ぐ潮の音のみに
眠りがたかるわれと思ふや



所謂大谷石の庇に對する私の見方と帝國ホテルの感じ

村野藤吾

……若し氏の小述をお讀みになる方がありますなら、その前に八月號の本野さんの御説を一度讀んでいたゞきたいのです。……

✻

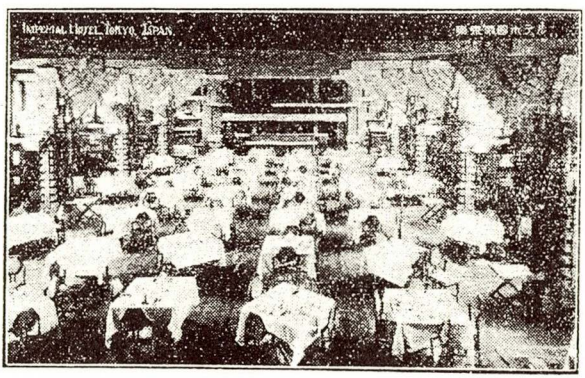
實物を前に控へて居ないのですから、只私の記憶や、印象をたゞることにします。嚴密にいふなら、それは甚だ無責任のようでもありますが、必らずしも單なる規定でないことだけを前以て御斷りして置きたいのです。但しお前の言ふことは事實とは非常に違つたものだと言わるればそれまでゞす。私は文句なしに此の小述を引き込めるだけです。

✻

ホテルの北側入口に低く、そして、非常に長く突出した平つたい庇があります。見たところ一間半位も突き出て居るかも知れませんが、とまれ非常に長く突き出て居ること丈けは確かです。外

は庇の三方の縁が大谷石で、一方は建物にくつゝいて居ます。そして、庇の下は直ぐに入口になつて居て、氣持の良い位開けつ放してあります。而し庇を支へる爲めには外部に何の仕掛けもありません無論、ブラケットだの吊金物のと云ふ樣な極めて通俗な、私共が普通やりそうな手段さへも講じてないので一寸見ると危險な感じがします、庇の平つたい部分が何であるかは少しもわかりません、甲は鐵筋コンクリートの平つたい突出だとも言ひ、乙は、鐵骨に何か張つてるんだとも言ひますが多分そんなもので出來て居て、三方に大谷石を何かの方法で取りつけてるんでせう。

庇の三方の縁が大谷石で出來てる爲めに、見たところ、大谷石の庇の樣で、そして自身の强度で自重に耐へて居るものゝ樣にしか見られませんがそれにしては、大谷石の形があまり細長い感じがして、多少力學上の頭のあるものにはとても自身の强度では支へ切れないだらうと想ふこと丈けは確かです。



「危險な感じがするなア」

「異樣だね。」

「大膽と言ふよりも寧ろアブノルマルだよ それに不自然じやないか。」

と次から、次にそうした感じがこみ上げて來ます。すると智惠が安心しろ！と命じます。

命が惜しいんでせう。一度はきつと歩みをとめるか又は智惠が私に安心を强いる前に、少なくとも最初の一度は好奇の目を瞭つて庇の惠を仰で見ます。

✽

○「そりや危險な感じがすると思ふ君の考へが間違つてるんだ、今の科學があの大谷石を支へきれないと思ふか。……たとへブラケット

もそれから吊金物もないにしろ」

△「だつて僕は、僕の實感を裏切る譯にはゆかないからね、どうも、僕丈けが神經質に出來てるせいでもないらしい、AもBもそう云つてるよだと言ふのは、あの庇は、大谷石の外何も見えてないじやないか、明かに大谷石の　あの臍脆弱な大谷石の庇にしきあ見えないじあないかあんなプロポーションで、どうしてあの長い突出が支へられるんだ」

○「だけど、内部に石を落さない樣に丈夫な仕掛けがしてあるんだよ」

△「而しあの庇の意匠を見給へ。大谷石の突出の外、何も見えないじやないか、明かにそれは大谷石の庇なんだ。仕掛がしてある。丈夫な架剛が石を支へて居ると云つても、それは僕に言はすれば辯解としきあ取れないね。辯解なら辯解の樣に目に見える樣にして貰いたい」

「見えなくつたつて、君の優秀な科學と經驗で考へたらそんな問題は出ない筈だがね」

「僕はまぬけだよ」一にこれはこうして持つてるんだと表はしてなけりやあんなに重い石の突出が、あの細さで支へられそうに思へないんだ實際計算をしても、亦實驗をしても、あの格向ちあ先づ大谷石の庇は折れつちまうにきまつてらあね」

○「そう考へるのは君の勝手だが、君の頭の惡いことだけは確だ」

△「どうでもいゝさ。……而し僕の頭は正直だよ」

○「……」

△「……」

✽

これが先夜協會の席上で私が提案しました、大谷石の庇に對する案の内容だつたつもりなのですそれが本野さんの御說の出發點と、どんな關係にあるかは私にもわかりませんが、とまれ、此の印象と對話とを御讀みになる方は大體に於て二つの問題に氣附かれるでせう。一つは構造の問題……ある架剛が大谷石を支へて居ることをどう見るか……他の一つは意匠の問題　庇の主體がある丈夫な架剛體であるにもかゝわらず、一見大谷石の

△

庇の様に見えることをどう考へるか、而も大谷石の格向が自身の強度では支へ切れない様な細さであるにもかゝわらず、折れもせずに居ることをどう考へるかと言ふ二つの問題を。

✲

そこで私は右の二つの問題を考へることころで、私自身の分野に入つてしばらく此の小述を進めて行こうと考へます、その前に一寸斷つておきたいことはライト氏の態度の問題です。幸にして私は氏の作品については僅かに二つしか知りません、一つはシカゴで例の團子の串ざしの様なものがくつつい居た建物と、今一つは帝國ホテルです。其の他のことは所謂巷間の噂であつて、無論根據あるものとは思へません。ところで氏の態度がどうであるかと云ふことを初めから極めてかゝることは事實を事實として、感觸する上に非常な不便があり、且つ結論の歸終に於て冷靜なる判斷をあやまりはしないかと思ひます、かう私は初めから氏について知らないまゝの全く白紙の態度で此の小述を進めることにした方がいゝと思ふのです。

✲

私は此の庇を非常に長い突出だと考へます。そう考へた方が問題の性質から云つても解り易いと考へます。なぜなら一間半にしても、亦それより長いと考へても、落ちそうな危險な感じと云ふことについては變りがありません。そして先に暗示した二つの問題がこれから後に進んで行く私の小述に對してどんな割合で織り込まれ行くか、私にも瞭りとはわかりませんが、私は先づ構造上の問題だと思われることに向つて最初の考案を試みませうか。

✲

素直に私の考へを述ぶれば、石と、架剛體（假りに鐵筋コンクリートとする）との接際に向つて私の注意の焦點が燃燒を始めます、そして疑問が次の諸點に向つて放たれるのです。

大谷石の色と線と面の感じを利用せんが爲めに人の推斷に訴へるより外に、吾々の目には瞭きりと知ることの出來ない様な狀態にある鐵筋コンクリートに大谷石をくつゝけて居る點……構造を大

谷石が隠して自分がそれに代つて居る點……つまり、大谷石は自から構造と裝飾とを兼ねて居る代りに力學上の缺陷を補ふことを忘れて居る樣な點に向つて。

✻

それは明かに……A大谷石の犧牲を越へた意匠から起つて來るものと……B主體の架剛を大谷石が包んで居ることから起つて來たのだと思ひます

そして此の疑問は大谷石を單なる張りつけ石と見るより外に解決の路は開けて居ないかと思ひますが、之れを裝飾と見るには、あまりにゴツイ石の重さであります。それは裝飾としては意味を成さない位に(constructive meaning)に缺けて居る樣です。大谷石を取りつけてあることを表はすために ボールトの頭を出して置くと言ふ樣な、先づ私共がやりそうな低俗な手段さへも缺けて居ます。

總ては智恵と智識だけがそれを推斷し得るばかりですから難しいんです。

✻

而しながら大谷石はその折れそうなプロポーションであるにもかゝわらず依然として雨露に對して突き出て居る 落ちもせず、折れもせずに客を待つて居ます。それをどう考へたらいゝか、之れをジャスチファイするために鐵筋コンクリートの例——鐵筋コンクリートが生れた頃は、誰れしも持ち送りのない突出を危なげに感じたことゝ思ふ——而し永い經驗と習慣とは遂に安心して之れに對する事の出來る境地に導き入れた……と云ふその鐵筋コンクリートの例を以て引證されるのがどうか。

思ふに若し氏の庇が鐵筋コンクリーばかりで出來て居たら、唯れも危かしく思ふものは有ますまい。思ふ方が間違ひであります。そして無論問題はありません。なぜなら、鐵筋コンクリートが安全だと云ふことを今日の人が知り得るのは、それを構造として見るも、亦之れを裝飾として見るも、意匠に於て、それが美である所に一致した安示上の、又從而心理學上の根據を持つて居るものと思ふからです。例へば楕圓が美しいとか、三角

形が良いとか云ふのは、エフスチシチイーとか剛性が、ある美を暗示して居るからです。つまり最高の美は又それ丈け深刻に數理の上に根據をおいて居るものと思ふのです。ところが、私はその鐵筋コンクリートのうちに大谷石の特性と、その形や格向と云ふものを考へなければなりません。

而し人はその大谷石を丈夫な鐵筋コンクリートで支へて居るんだと云ふでせう。然しながらBは馬鹿を云へ！そんなことがあるものか！それは明かに大谷石の庇なんだ！と云ふかも知れません。又Bはそう言ひ得るのです。なぜなら若しも此の石が鐵筋コンクリートの剛性で安全に支へられて居る爲めには、而も人々の心に安心を訴へる爲めには、大谷石の意匠はもつと輕い意味のものであるか。又は、それ自身の格向に於てもつと化學的の意味を表はすものでなければならぬと考へますそれにもかゝわらずコンクリートは明かに大谷石に其の責任を轉荷して、自身は人々の目から隱れて、只推斷の世界に引き込んで居るのが事實としての庇の感じです。ですからこうしたコンクリートの役目をどう見ようと見る人の勝手である樣に思はれます。この考への下に私の見方は鐵筋コンクリートの剛性と云ふものを考へる理由を見出すに苦しむものです、そして此の問題に對する鐵筋コンクリートの例に依る引證は全々役立たぬことゝなりました。

依然として庇は——此の大谷石の庇は危なげな格向から僅かに支へられて、永久にその不自然な姿を雨露に晒らすことでせう。而し人は落ちないで居るんだと云ふでせう、Bはそれだから不思議だと云ふのです。

問題はもとに歸ります。

然らば此の石とコンクリートとの合成庇の突飛な突出に對して科學が之れを認めるかどうか、そして科學は架剛と石との結合をどう考へるか、私は茲で科學が持つところの或る惡魔的な魔術について述べ樣とは思ひませんが。私としても科學の力で此の不思議な石の突出が支へられて居ること丈けは認められます。そこで私は構造上の眞と云ふ問題に入つて此の事を考へて見ようと思ひます。

私によれば凡て一切の醜惡は不合理なるものゝ別名です。

こゝで私は意匠の問題に入つた樣な氣がしますが元來構造上の眞と云ふことは材料や施行法の變遷や進歩か科學思想の發達から、今と昔とは餘程異つて來ました。而しながら。假りに之れを材料に丈けについて考へれば、材料夫れ自身の有する美觀なり、又は構造上の意義はその材料の持性の上に變化が來ない以上夫れ等の材料が構造的に吾々に訴へる、ある美しいプロポーションには限度がある筈です。無論時代思潮と共に多少の變化はあるにしても鐵と石とを同一の美におく事は出來ません。これは單に感じの問題でなく、明かに實驗することが出來ます。同樣に鐵筋コンクリートの剛性と大谷石の强度とが一致しない以上、鐵筋コンクリートの力學上、合理的なプロポーションを直ちに大谷石を以て代用することの不合理な意匠であることが證明されます　如何なる現代科學思想を以てしても脆弱な大谷石の特性を鐵筋コンクリート同樣に考へることは出來ないことだと思ひます。

無論現代科學の賜として構造は自由になりました。或は無限に自由になつたと云つてもいゝでせう。と云つて、鐵筋コンクリートの突出が大谷石の庇に化けることは出來ないと考へます、

つまり大谷石にも、その分子の構成や强度から來るあの力學上の美的限度がある筈です。此の限界に於てのみ大谷石の美が生れることゝ思ひますましてその限界に於てのみ、大谷石は構造上の眞にある筈です。換言すればその特性を越へては、本來の美を、之れを單なる張りつけものと見る以外には考へられない筈です。例へば折れそうな大谷石の庇には吾々は美と云ふものを認め得られないといふことです。つまり構造に於ても亦裝飾に於ても美は同時に數理上の合理性をそれ自からのうちに表はすものでなければならないと考へるのです。そして、それ以外に於ては斷じて醜惡なるものゝ範圍から脫することが出來ず、又之れを手傳つた構造を虛僞と見ないでは居られません。

こう考へるところで、私は再び帝國ホテルの底を眺めますと、不幸にも失望せずには居られません、あの偉大なライト氏の傑作に對し、一抹の暗影を投ずるものは何の爲めか、明かにそれは科學の有する、その無限な構造上の自由性ではないでせうか、科學が鐵筋コンクリートと大谷石との結合に役立つたことから起つたのではないでせうか

人はこうした構造上の自由性を醜惡に使用した結果を見て、尚之れに『構造上の眞』と云ふ最上の言葉を用ふる丈けのブロードマインドがあるか、

私はこうした構造上の現狀に對して『自由』と云ふ言葉をさへ用ふることを愼みたい位に思ふのです。

そこで私は構造上の眞と、構造上の自由性とが美に於て一致する爲めに何等か考へねばならなくなりました、これが爲めに私は構造を表現の手段としてライト氏が使用して居られると云ふ言葉を借りて考へることを許して貰ひたい。

表現の手段として構造を使用することは、或る限度以内に於ては恐らく建築術の總ての場合であり、同時に又構造夫れ自身の自然的な志向からある表現が生れることを以て意匠の一面だと考へることも亦或る限度以内に於ては充分信ぜらるべき根據を以て居ます、けれども問題はそのうちに含まれてある惡魔的な側面であります。(私が惡魔的と云ふのは例へば排他、抗爭、唯我獨尊、我執、虛僞、醜惡、誇大等を指すのです)そして此の惡魔は多くの場合手段がある限度を越へて强行された場合に吾々の目に映ずるのです。

例へば、私が或る建築の意匠に最高の美を自信して居るとします。……衆愚は只私を信じて私の作物を眺めさへすりやいゝんだ……と云ふ位の自信を以て。

そして私は私の自信を遂に實行し得たとします自然の結果として多少の不滿や失望か、又は到底理解し得ない美や、還境や、條件の輕視、又は自然的な構造上の志向から著しくその自由性の酷使亂用、そしてその結果は以外の出費が施主の不滿を買ふ樣なことは有り勝ちのことだと思ひます、有り得たと云ふ假定のもとに、私の考へを進むれ

ば、こうした私の態度を誰れか是認するでせう。たとへ私の態度が至高至純であるとしても、私は結果をその批判なしに是認する譯にはゆきません。

無論それ等は或る程度迄恐らく建築工事に於ける凡ての場合に起る問題であるかも知れませんがライト氏は帝國ホテルの建築に於て豊富な天分を實現せんとして、氏の藝術的良心を強要しなかつたでせうか。ありありと私はそれをホテルの隨所に實感します。そして大谷石の庇や食堂、天井のブラケットの如きは恐らくその最も甚だしい例であるかも知れません。假令氏の態度が至高至純であるとしても、それではあまりに興奮し過ぎては居ないでせうか。そして、實際建築の擔當者だと考へ得られるでせうか。所謂巷間の噂であるとしても建築當時の當の責任者たる某重役の辭職説の眞相などは又此の間の消息を裏書きするものではないでせうか。

そこで私はそうした藝術的良心の強烈な把持者達に警告したい。

眞と自由とが美の王座にあらねばならぬことは至高の道徳が之れを支配する時であると。要之ライト氏はその浮世繪の様な色に於て、又線のデリカシーに於て、又その面の交響樂に於て、何者かを常人の到底企圖し得ない程度に表現し得たかも知れませんが、私はライト氏に於てのみ表現せんが爲めの表現を罪惡だと知るものです。

✻

私は此の小さな庇について言ふ可くあまり多くを費してしまつたことを感じます。それは私の實感に依れば、ホテルの建物の感じを最も端的に表はして居るものを私は此の庇に見出したからです『極端な建築』只これ丈けで此の建物に對する感じは盡きて居ます、そして私は次の數句を書き添へることに依つて更らに私の考へを進めることを止しませう。

人間は彼れの特權を濫用することによつて、特權の爲めに濫用される、大地に根をおろして梢を空にもたげるものは榮える、梢に大地をつぎ木して、そこに世界を作らうとするものは危い。而してこの奇怪な輕業が如何にわが藝術家によつて好んで湧出されるよ(有島氏藝術と生活)

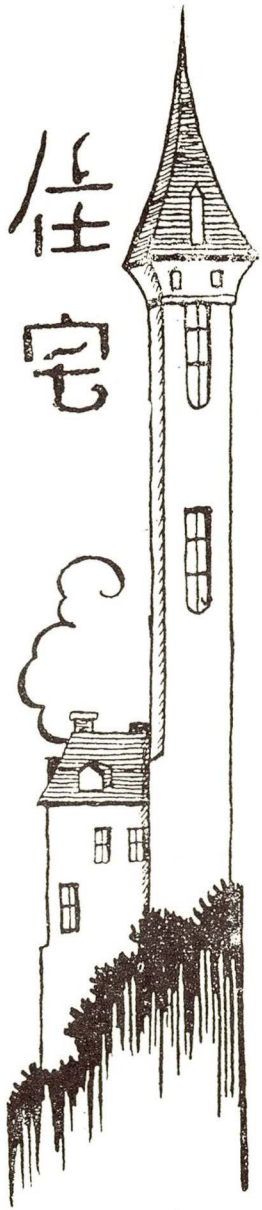
十二、八、廿六

住宅

千里山のにい邑より

‖土地住宅會社行脚(A)‖

郊邨



大阪近郊、土地住宅會社の經營地行脚に出掛けます。

S君。

暑いのは、安居に氷を噛むでさへ却々な事ですから、此處の暑さは亦一入です。けれども、風物の快、環境の自然の眺は、何んといつても遖に山郷です。照る陽を浴びつゝ絞る汗でも、此處許りは何んたる心地佳い事でしょう。わたしは、都門の苦熱から遁れて山郷の烈暑に踏み入つても、此

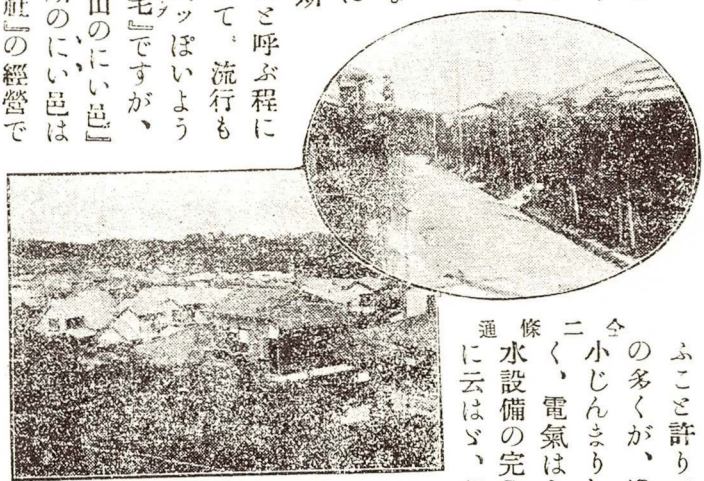
S君。

人は苦熱に喘ぎて、果敢ない涼味を、氷塊の一ひらにも貪り求むる都塵の巷に、われはけふより姑しさすらい出でつ、碧藍の漾へ、煙波の壯味も、扨ては蟬しぐれ、翠巒樹蔭の快趣も、横目に眺めつ、炎下當に百度、檜笠の緒を掠めて過ぎるそよぎにも、萬斛の涼味を偲むで、われは今、北攝の一角、わが心を唆る名も妙へな『千里山』のにい邑を訪れて居ります。わたしは、此處を振り出しに

處のそれ許りは、たしかに、心閑やかな晴々しい苦熱です。窓下樹蔭に身を寄せて、われを取り巻く巒丘綠林に見遣れば忽ち萬斛の涼味はわれに迫つて參ります。誰が何んと云つても此處のいい邑は最も佳い景勝の地を占めたものです。

S君。

斯ういやに感心許りして、肝腎な事を忘れましたが、それは、斯のいい邑の經營のことです。わたしは斯の邑を、屢き違へて例の『田園都市』と呼ぶ程に間が抜けては居りませんが、さりとて、流行ものゝ『文化村』と謂ふのも、餘りに安ッぽいような感がします。ほんとうは『郊外住宅』ですが、ぎこちない氣もしますから、『千里山のいい邑』と謂つた方がよいでしょう。扨て斯のいい邑は君も御承知の大阪住宅經營株式會社』の經營ですが、わたしは、只今、目ぼしい處を一つ々々覽畢つて、大層快く思ふてゐる處です。それは家の孰れもが氣味のよい程鮮し味をもつてゐる、といふこと許りでなく、大阪に珍しくも、その多くが、ゆつたりとした地面を占めて今小じんまりした一軒建、といふだけでなく、電氣は勿論、瓦斯や、上水道や、下水設備の完全なといふのみでなく、一口に云はゞ、從來の借家式な型を全然打破して、そのどれもが、ほんとうに改善味の著しく現はれてゐる事、謂はばXである。千里山に住り代つて、怎うしたならば宅居住生活の利便と享樂と滿足を獲られるか、といふこと全景とに苦心を拂はれた蹟は、まざ〳〵とそのDetailに現はれてゐることです。所謂家主氣質に苦い經驗を有つてゐるわたし達プロは、斯麼事に大層嬉しく思ひました。



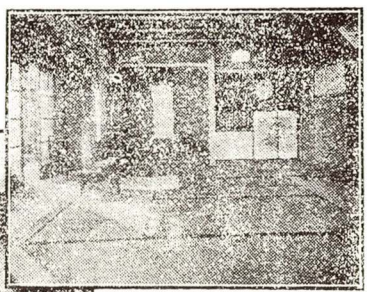
S君。

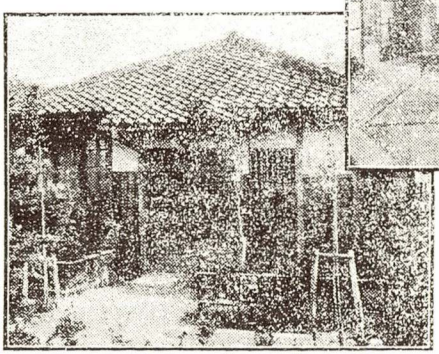
大阪の築港沖を懐はせる西の方、瑠璃色の中空に入道雲は崩れて、此方の杉林には蟬時雨がして居ります。そよ風が檜笠の蔭を撫でていゝ氣持ちです。

わたしは、千里山のにい邑の事を大層感心さゝれたように書きましたが、まつたく汗うなのです。事の序ですから、いつその事、今少しく詳細に、も少し具體的に書いて、わたしの行脚第一程を君にまで報告することに致しましょう。

S君。

わたしは、只今住宅のあらましを覽了つて、會社の千里山事務所で、色んな説明を聽いたり、それに關する種々な印刷物を覽せて頂いたりして、大體斯の會社の經營振りが解りました、掻い摘むで何かの事を申上げましょう。





日本一ーマンを標準とする社會事業としての住宅經營

例一

先づ、斯の會社の起りが却々嬉しいのです。それは、例の米騒動の前後で、物價は暴騰、家は拂底といふアノ中産階級脅威の時代に、大阪の有識者仲間でも種々に對策を議せられたことは、君も御存じの通りです。丁度そのときに、住宅議讓を緩和するため政府は「住宅組合法」抔を實施して、低利資金の貸渡しを決行したのですが、斯の會社の發起人達は、斯る機會に於て、單なる營利事業でなく、會社の配當に制限を附して、中産階級殊にサラリ

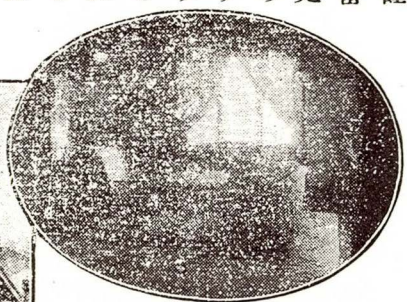
式の住宅を經營しよう、との相談が纏つて、何んでも大正八年の十月十四日とかに、知名の士三百名餘りを大阪中央公會堂に招待して、斯の計畫を發表したのたそうですが、斯くして忽ち壹千萬圓の住宅經營會社が出來たのです。

S君。

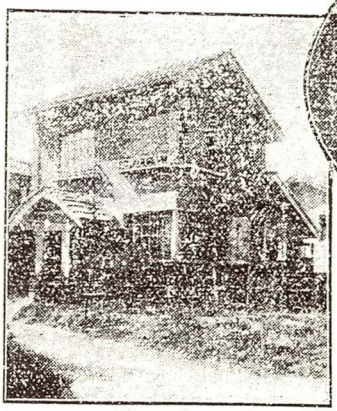
わたしは、斯うした麗しい動機が、今現に千里山住宅の一つ々々に現はれてゐることを見逃す譯には參りません。住宅饑饉のほとぼりは、今尚ほ相當に強いです。扨てこそ、完成した約百戸の住宅は忽ちにして塞つて了つたのですが、今尚ほ約百五十戸許りの改良住宅と純日本式なそれを建築中です。多分それも瞬く間に契約濟になるでしょう、お互にいつぱし住宅には惱まされますゝ。

S君。

住宅の一つ々々に就いてゞなくとも、その二三の代表的なものを君に說明してお知らせしたいのですが、餘りに書く事の多くして、とてもそれに及ばないのです。それは、寫眞と平面圖を二三葉添つて置きましたから、それで大體を御推想被下いゝし それよりか、わたしの今回土地住宅會社巡りの順序として、寧ろ、住宅經營の實際と理想をお知らせする事がよい、と存じます。それを大略申述べましょう。

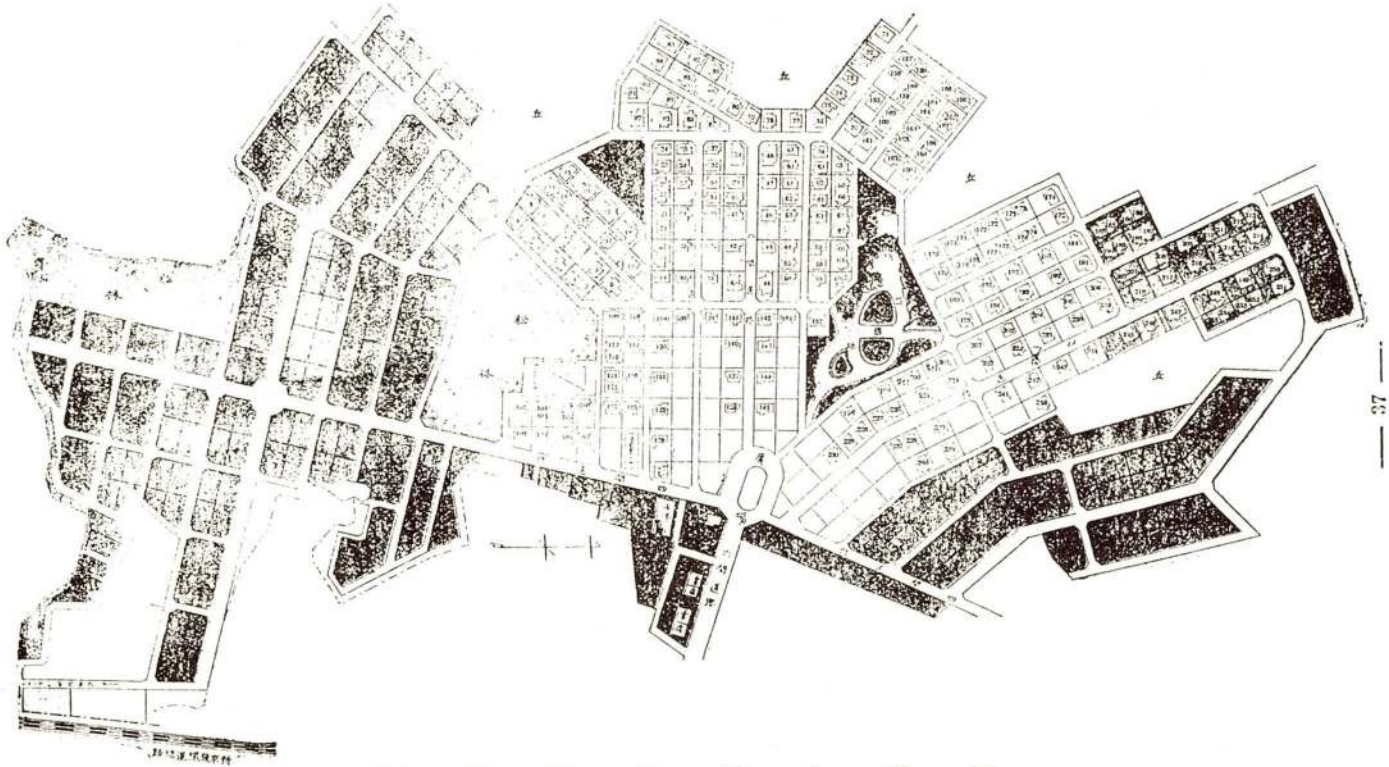


居間兼書齋・應接室



改良住宅の一例

先づ會社は二つの方針を執つてゐる樣です。それは、會社の資本金と、例の借入低利資金とですが、低資の方は主もに住宅建築資金に振り向けて、その建設されたる住宅は、殆んど世帶道具さへ持ち込めばよい程に凡ゆる設備を整へて貸家とする外、年賦若くは月賦賣の住宅をも拵へるのだそうですが、今は主もに貸家建築に全力を注ひでゐるようです。そして、會社資本金を以ては土地、水道、瓦斯、浴場、倶樂部、遊園地や、テニスコート抔の附帶設備に向けるのだとのことです、現に此處の下水道は暗渠制の爲も完備したものゝようですが、上水道も簡易裝置による理想的なもので、各戸の配管を通じて

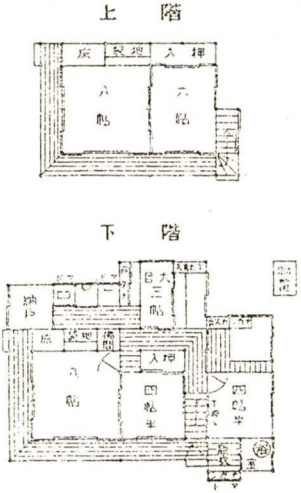


千里山住宅配置圖

逝る清冽な水は全く大阪のそれに異ならないです浴場も相當素晴しいものですが、瓦斯も戸毎に通じて居ります。今の處倶樂部の建設、園遊地の裝築、テニスコートの整備や種々な附帶設備に非常な努力を拂つてゐるようです。

S君。

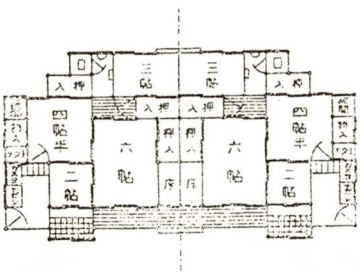
斯うした千里山の住宅經營地は十四萬坪といふ大したものですが、是れに一千戸以上の住宅を建設する外、會社は大阪市外田邊町鶴ケ丘にも一萬五千坪許の住宅地を經營して、是れに二百五十戸許りを建設することになつて居ります。そして、現に鶴ケ丘には、二百戸許り、千里山には約百戸の住宅を建築されて、尙ほ建築中のものが隨分ありますが、前にも申上げたように借受の申込は却々盛なものです。



S君。

斯の會社が住宅を經營する方針は略ぼ前に申上げた通りですが、わたしは、色んな書類を覽せて頂いてゐる中に、面白いものを目附けたのです。それは、結局、會社の經營方針を具體化したものになるのですが、先づ第一は、株主の配當制限で定款には

『法定積立金百分ノ五以上別途積立金百分ノ五以上、株主配當金年六朱以下、後略、それでゐて配當の最高率が、そこいらの銀行利息にも及ばない、といふ殊勝さは、たしかに店子達の讃仰すべき家主さんです。その次は、サラリーマンでなくては貸さない、といふ會社の方針



とあるのを御覽なさい。何しろ章魚配でも構はないから一朱でも配當を高くしろ、といふ當世の株主氣質に、積立金が配當率の殆んど二倍近

は先程書いたのですが、扨て、現住貸してゐる凡ての住宅中、銀行、會社、商店員が二百五十七、官公吏が十六、學校職員が二十、醫師産婆其他の者十、といふ實績を示して居りますのは嬉しい事です。

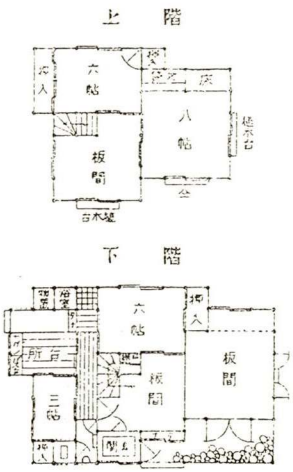
S君。

大分長談議になつて、さなきだに肩の凝る奴は禁物である昨今だのに、こんなもので君の額から汗を搾取するのは（社會主義者の云葉を失敬して）野暮チキだが、まあ辛抱して讀むで呉給へ……斯う書いて、ちよッと窓外に眼を遣つたら、木立の茂みを通して、氷屋の三角形の旗が隠見するのも、斯うした場所でなくては見られぬ情景だ。

扨て、只今まで種々な事を書いにが、肝腎な事をつい書き遅れた、それは、お互に最も肉薄されてゐる程に切實な關係を有つてゐる例の家賃の問題です。千里出のにい邑百戸の住宅は皆それ〳〵の特異を有つて、家賃も千差萬別だが、大觀した處で、こんなものが大阪にでもあつたならば、とても斯うした廉い家賃では一戸として借れッこはない、とわたしは斗う感じました。まつたく廉いものです。

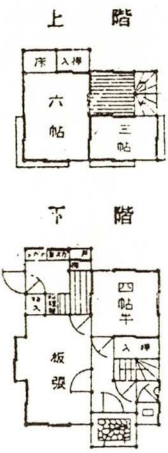
S君。

今此處にその一つ々々をお知らせすることは出來ないが、先づ標準を二三擧げてみれば、日本式で最低二十九圓（延坪十五坪、敷地三十七坪）最高六十七圓五十錢（延坪三十七坪一二階建一、敷地七十三坪）改良式では最低三十五圓（二階建、延坪約十九坪、敷地三十三坪）最高六十九圓（二階建延坪三十六坪餘、敷地（七十五坪）斯ういふ兩端の値頃だが、普通三十一二圓から、五、七、八圓の處も多いようです。月俸生活者の住宅としては、此處らが最も理想向きでしょう。



S君。

わたしは尚ほ多くのお知らせすべきものを有つて居りますが、とても此處では書き竭せません。大阪の熱街から、僅に二十五分程で、こんな山の中に文化的な新い邑を見舞はれるのは、むしろ奇異な感じが致します。今半歳もしたならば新京阪電車が市電天六へ直通するそうですから、斯うなれば一層短縮して十五分程とは、あの山郷と熱街を併せ考へて、一段と奇異な感を深ふせずにはゐられません。要するに、此の會社はよい處を目附けたものだ、といふことに歸します。



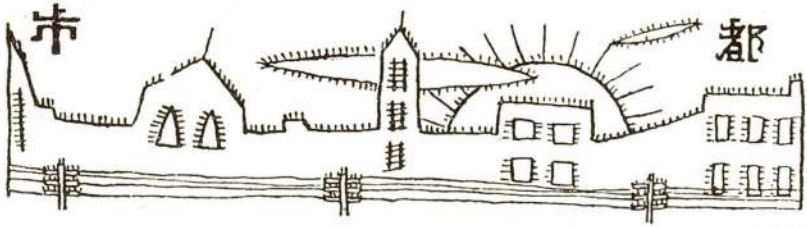
S君。

わたしは、是れから某會社の經營地へ向けて出發致します。何れ其處から亦異つたものをお知らせするでしょうが、折角御大切に願ひます。今は夕照彼方の杉林に榮へて、さながら、北極のオーロラを懐はせます。斯の幸福に滿てるが如きにい邑の氣高き靜けさと共に、夕陽の靜に々々沈み行くさま、何んたる壯嚴な事でしよう。是れだけでも都市の人達が祝福されてゐない證據です。

S君

わたしは操觚者にして、ノーブルな理想に生きてゐることはお知りの通りです、よい歳をしながら肝腎なお仕事はよい加減にして、人の蔭にて他人の良い事を呪つて月俸の一圓にでも有り附うとしてゐる所存のよくない奴に、斯うした境地を見せてやりたいです、可哀想な連中です。

× × ×



紐育市の脅威されある建築界

═建築界のタマニー黨═

一記者

紐育市に於ける由々しき社會問題として救濟を要すべきものは、先づ住宅を與へることにある。大戰以來交戰國の都市に於ける住宅は非常な缺乏を來してゐるが、紐育市も同樣に惱まされてゐる。即ち、住宅の需用と供給は、前者に於て著しい增加を來したと同時に、後者に於て甚しく減退を來してゐる。是れは一面に於て『借家法』の不完全と無用な干渉にも因る、と批難してゐる者もある。

驚く事には、從來紐育市民の住むでゐる借家の殆むど九十九%は、あはよくば浸れ手で粟の摑み取り式なことを目論むでゐる投機者流によつて、或はヨリ多く利廻りをよくしようとする資本家によつて建てられたのだから、借家そのもの及び借家人のため抔は聊かも考へてゐない、斯うした家に彼等借家人は住むでゐるのだ。斯る現象は內面に於て、紐育市民の殆むど全部に近い程な數の者は、孰も自分の住ひを自ら拵へ得ない人達で、之を反對の側から云はゞ、紐育市民中自分の蝸居すら拵へ得る者は極めて少數だ、といふことになる。斯うした社會現象を控へて、若も家を建てることを中止されたならば、一體怎うなるであらうか、云ふまでもなく住宅饑饉來である。事實、紐育でも米國が戰爭參加以來凡ゆるものが軍需品に振り向けられた結果、家の材料もそれで、軍用以外の殆むど凡ての建

築は中止されたのである。それならばあの國際的大喧嘩が濟むでから家は出來たかといふに、投機者にしろ一般投資家にしろ勿論算呂盤は彼等の生命を彈き出すのだから、盤上に借家を拵へてやるのは餘りよい利廻りでない、と知れたから、資本は他の事業に向つて流入して、家は增々拂底となつた。そして、その不引合ひといふのは、他の仕事の方が割りのよいのと、建築材料や勞賃が莫迦に騰貴したからであつた。

何處でもある事だが、尻に火がつくまでは無關心で、いざ火がついたとなれば周章ふためいて、火を按み消すとするものだ。紐育市でも、彼樣に住宅饑饉といふ火がついて來たものだから、『聯合住宅立法委員會』ちゆう奴が出來て、紐育市內の建築費暴騰の原因を取り調べに懸つた。所謂『調査』といふ奴は、何處でも火急の場合に限つてあるものだ。そして段々と調査した處、是れは何んでも建築材料ツラストや、保險會社から貯蓄銀行抔も怪しいといふことになつた、建築材料ツラストが、立法委員會の黑表に上つたのは、その名からして前科者らしいが、保險會社や貯蓄銀行と來ては聊か變だ、けれども、紐育市の建築事業に用はれた資金の大部分が斯の向きから出てゐる、といふことを知つたならば、ハハーン！と合點行くであらうが、因業な日本の銀行屋さん許りではない處にお目留められたい。

斯くて法律的調査のメッスは、彼等を剔抉して微細に入つた、そうして種々の方面に斯の解剖刀は振はれた、果然、病巢は發見されて、見惡い種々なものを取り出した、それは、先づ建築學者と建築勞働組合との狎れ合ひであつた、勞働組合指導者の或者、中にも建築勞働會議所長の收賄であつた、製鋼會社や內國建築家組合が紐育市の建築事業を妨害してゐる事實であつた。その他曰く何と、想像するだに剩がある。

建築勞働會議所は要するに建築勞働組合の聯合會であつて、斯の會議所は建築事業使用主組合と實に眞恐な契約を結むだ、それは二箇年間建築勞働組合員は使用主組合に屬する者のためにのみ働き、使用主は件の勞働組合員の外は使はない、而

も賃金を一割五歩乃至二割値上げしたのである。そうして、斯の契約は彼等によつて種々に悪用されたのである。今その悪例の一つ二つを擧げてみると、彼れは建築勞働會議所長である外、船渠勞働者の地方組長であつて、此の組合から年俸三萬弗といふ無茶な報酬を取つてゐる上に、彼れは紐育の建築業者エフレイン、レヴイから二萬五千を收賄して、勞働組合員全部が同盟罷工することを請託されたのであつた。或は二人の請負業者から三萬七千五百弗で請負ふた仕事を、八萬五千七百八十三弗で第三の請負業者に渡すの餘儀ないように仕向けたこともあつた。それは、鉛工主組合が建築勞働會議所と結托して开うしたのであるが、或アパートメントの模様換をするに就いて、最初に鉛管工事を請負ふたのはヨセフ、リブコフといふ者で三萬七千五百弗であつた。處が折悪しくリブコフは會費や入會金を拂つても鉛工主組合の會員證を受取つてゐなかつたゝめ、仕事を始めてから數週間目に鉛工主組合の委員がリブコフは鉛工主組合員でないと主張して、ついに仕事を取り上さした。斯くて、更にデイーセルといふ者に遣らしたが、數週間後に是も同盟罷業をやられたゝめ是も仕事をやめた。仍で今度はジャルコ商會と契約した。彼樣にして、リブコフに四千八百三十一弗デイーセルに一萬七千百六十四弗を仕事の分け前として拂はしめたが、結局、最初三萬七千五百弗の仕事に對して、正味九萬二千弗を拂はしめた、斯うした惡辣な事實は幾らもある。是れは要するに、建築費を增すため建築請負業者の用ひた常套手段である。その他工事請負入札の如きも、例へば或公立學校の煖房及通風工事の入札に際して、聯合請負人六名は最初に入札をヘットクックといふ當局者へ差出したが、最低九萬二千七百七十弗であつたにも拘はらず、ヘットクックは之れを十萬千五百弗に引上げた。その落札者であるウエルス、アンド、ニユートンの入札は九萬四千弗であつたのに、ヘットクックはそれを十萬一千五十弗に引上げたのであるが、斯くして總ての入札が綜合されたときには、孰も僅に二三百弗の差に過ぎなかつたのである、斯うした事實は幾らもある。

要するに、往年の紐育市政に於けるタマニーに外ならないのであつた。

まだ〳〵ひどい奴になると、建築材料商の結托を擧げねばならぬ。それには、聯合住宅立法委員會の首腦であるサミュエル、アンターマイアーといふ人の言つたことを此處に擧げるのが一等明瞭である。曰く。我々が發表せんと企てたのは材料商の團結で、第一は製造者から小賣商に至るまで建築材料に關する三十二系統の各別なる同業組合其次は建築材料使用主組合の首領の下に各種組合の聯合である。又其次は、勞力が多くの場合建築勞働會議所に網羅されてゐたのみならず、使用主も亦建築勞働會議所と建築事業使用主組合との關係から是等の組合の或物に網羅されて入會を強制されたことで、それで若し或使用主及び材料商が價額を承認したり注文を分配したりする組合の會員でなかつた場合には、たとひ勞働組合の勞働者のみを使用してゐても直ぐにストライキに遭ふ。何の爲だか解ちずに市内の建築工事から勞働者は拉し去られてゐる。勞働者は決して得られない、賃金のためでもなく、我々の大多數が今日信賴する組合勞働の問題でもなく、全く彼等の知らない外部の問題である。是が建築事業に浸潤して、之を禁止し所罰するに非れば紐育市内の建築工事は不可能であるまでに擴がつたのである』

其他、セメントの如きも、製造者は或地方に限つてのみ賣つてゐる。隨つて紐育の請負業者は其製品を他の地方へ向ける一製造者からセメントを買ひ得ない。妙な事にはセメントでも入札の價格が始むど同樣であることだ。例へば、プラザホテル建增工事に要したセメントの入札に就いても、十一名の入札者中十名までは一樽四弗五十仙で、他の一名は僅に十仙高に過ぎなかつた。而も最も驚くべき事は、從來セメント一樽の價格が九十仙位であつたのに、それが十一人共揃ひも揃ふて一樽四弗以上は何んたることであらう。斯うした幾多の顯著すべき事實に對し、又建築界の腐敗せる空氣に對して、茲に一種の公憤は勃發した、それは、國内有力の建築材料會社が勞働組合員不使用の同盟、即ち反勞働組合主義の旺盛を來さんとし

てゐる事である。例へば、『合衆國製鋼會社』と云ふべスレヘム製鋼會社』は宣言して、紐育の建築請負事業者が鋼材建築に組合勞働者を使用しないことを承諾しなければ決して鋼材をその者に供給しないことにしたのと、國内鋼製産高の六割を占めてゐる『内國製造者組合』と件の『合衆國製鋼會社』が同盟して、同様な宣言をなしたが、斯の兩者を合すれば、國内鋼材全製産額の九十五パーセントを占めてゐる處の最も有力な相手である。その結果トムプソン、スターレット會社及びフーラー建築會社の如き斯の國内に於ける最大な建築會社は組合勞働者を使用してゐるためその鋼材組立が出來なかつた。ついに、之等請負業者は、非勞働組合員を使つてゐる他の請負業者に之を下請させなければならぬ破目に到つたこともあつた。然るに、紐育に於ける最少熟練な勞働者の殆ど悉くは勞働組合に屬してゐるため、斯く非勞働組合員を使用しなければならぬ影響は著く建築費に及ぼして、例へば件の會社で請負ふた一建築物の五百萬弗なり總工費が竟に二十五萬弗から五十萬弗に到つたといふ事實もあつた。

以上の僅なる事實だけを以て充分に窺知し得る紐育市の建築界の腐敗は、要するに、建築請負業者と建築材料業者と勞働組合員とが同盟して、一種のツラスト而も横暴專恣なるそれを拵へたのに在る。併し、斯うした惡辣な彼等の結合も、『ロックウッド委員會』と稱せられてゐる前記の『聯合住宅委員會』殊にその首腦たるアンターマイアー氏の嚴密一歩も假藉せざる調査と指摘によりて一大鐵槌を下されたのである。而して、彼等は、今や殆むど再び立つ能はざるまでに剔抉され、殊にその大なる魔物である處の『建築事業を使用主組合や『建築勞働會議所』は、是も最早沒落の外はない運命に在る。

併し、此處に考へてみねばならぬ事は、斯くして彼等は鐵槌一打の下に碎滅したとしても、由來紐育市は斯うした惡辣な仕事の出來易い境地であり、レストランの食卓の片隅でも、行き交ふ往來の道端りでも、彼等各種の建築業關係者は再び何かの形式で惡業を盛り返すのは見易い事である。

即ち日本流義に云はゞ、所謂『濱の眞砂』だ。ロックウッド委員會』の折角な手柄も、ついには餘り効果を遺さないといふ破目になるかも知れない。茲に於て、問題は一轉する、即ち、その根柢的な解決方法は怎うしたら可いか、是である。仍で建築に關する或種類の營業を公益に關するものと認めて、それを取締るべき機關を設けたらば、といふ説もあり、又は家屋の供給を英吉利のように公益事業として取締つたらば　といふ説もある。從來投機者と投資の利潤を生まむがために、――然り、彼等の貪婪飽くなき利潤を掬へむために、何んの事はない、それらの一種の製産機關に過ぎない觀のあつた借家人等は、病弱、營養不良、妖遊娯結核病の蔓延などを以て酬ひられてゐる、斯の殘虐より彼等を脫せしむるは、獨り、住宅を私人の專恣なる供給に委せずして、市や州や國家の仕事としなければならぬ。英吉利は既に斯うした大なる惱みに打ち勝むとしてゐる。顧て、日本の現狀は怎麼ものであらうか、思ふだに不愉快な感に打たれざるを得ない、吾人は今此處にその多くを語るより、去つて衛生試驗所の統計に、自己の日常生活に質した方が最も有力なる説明者であらう。

日が波につかつて顫へるところに
海の砂が赤く走る
月が傾いて戰く遙に
海の砂が黄に流れる

埃及旅行記(二) 正誤表

頁	段の行	誤	正
五二	下の四	道路の兩眼	道路の兩側眼
同	下の一二	人家が點とある	人家が點々とある
五三	上の二	きいてゐれ	きいてゐた
同	下の五	Hoil	Hill
五四	上の六	Tomp	Tomb
同	下の一四	鐵面皮な	鐵面皮は
五五	上の九	基部そ	基部凡そ
五八	上の三	の士の間	の土の間
同	上の一七	注告	忠告

第五四頁插圖下 人面椰子像は人面獅子像

第五三頁下段第一行の次に第五四頁第二行目がつゞき、第五五頁上段の終りより第五三頁下段第二行目に戻り、更に第五四頁下段第一行の次に第五五頁下段第一行目がつゞく、夫れから後は順に讀んで頂き度い。



「るくそる」から『さつから』の一日

―埃及旅行記の二―

案内人傭入の大失敗―マメリユークの墓―『マハツッド、アリー』の家族廟―案内人（メダー『ロータ』島― El-Moallaka 寺―『フオスタート』廢墟―番人爺―『サツカラ』の一日―

工學博士　八戸成蟲樓

十月十七日　（火曜、好晴）

歐洲各國や印度旅行には、クック社で汽車の切符を求めると、其通用期間内は途中下車自由で甚だ便利であるから、埃及でも同樣と思ひ牧羊館より程近き同社支店へ行き、アスアン迄の切符入用の旨申込んだところ、係員は『途中ルクソルにて下車し得るのみ、夫れにても差支なきや』といふ不便極るが規則とあらば致し方なし、買ふのをやめ更にルクソル迄隨所案内人を雇ひ得るやをきくと、當地にて雇入れ目的地へ伴はざるべからず、

温良正直にして地理に精通せるものを撰び、午後宿へ差向くべしといふ。今迄の經驗によれば此社は相當信用し得るを以て、案内人の撰定を依頼したが、あとでこれは大失敗であつた事がわかつた

右の用事をすませたあと、市の南端に近きTombs of Mamelukes（マメリューク墓）の見物をした私は墓標に就て多大の興味を持つてゐるので亞米利加から始めて到る處で墓調べをした。今度こゝへ來たからにはマメリューク墓もコプト墓も出來得る限り見學せんとしたからである。

マメリュークとは中世及び近世埃及に於ける外國種の武士の一階級で、第十三世紀の頃、土耳古出身の王が西亞細亞及び埃及全國を領したとき、征復した國から少年を連れて來て近衛兵に仕立てたのであつた。これをMamluksと呼んだが、此等が漸く勢力を得、遂に西紀一二五〇年Kutuzなるもの王位を簒奪した。然るに十年の後更にBeibars王位に即き國々君主となつた。以降マメリュークは一五一七年土耳古人に征服せらるゝ迄埃及の主權者であつた。其王は何れもよく國を治め且つ富ましめ、尚文學、建築、美術を保護奬勵したのであつた。此年以來埃及は表面土耳古總督の支配下に隷せしも、事實はマメリュークの知事が數州づつを管轄してゐたのであつた。一八九八年那翁に征服せられた軍隊も實はマメリューク軍であつた。斯樣な次第であつたが一八一一年總督Mohammed Aliの爲め、マメリュークは總て國外に逐放せられ又は殺害されたのであつた。

此のマメリューク墓は市外なるも市に接し、Bab el-Karâfeh門外に在り、新古の墓標混ぜるも、古墓は保存法宜しきを得ないのでひどく破損してゐる、其上建築上美術上價値あるものは殆んどないといつていゝ。

此程より程遠からぬImâm Shâfii寺に近くモハメッド、アリーの家族廟即ちHôsh el-Bâshaがある、內部の墓標は總て白大理石にコラン經典の句を浮彫とし、地は朱或は青色にて埋めてあり、希臘乃至アルメニア國工人の作といふ、美麗にして俗人の目を奪ふに足るも、是亦美術上の價値に乏しく、廟は圓屋根を架せる大建築であるが、墓標

同様平凡にして格好また言ふに足らぬ。

午前の見學はこれ丈けに止め、歸宿して晝食を認め自室に休憩してゐると、約の如くクック社よりの案内人來訪した、名をアアラージ、メダと呼び年齡五十歳前後なるべく、會話に熟達し地理も相當に心得居るもの、如きも、何となく好ましからぬ男であつた。併し一人の知己なく、公使館も領事館もなき開路に於いて、他に獨力適當なるものを雇入れ得る見込なければ、クック社の推薦とあるを信ずるより他に方法なき故、來る二十三日より四日間雇入るゝ旨を約して去らしめた。

午後は古開路の見學を兼ね此方面に行き、先づ渡船により Island of Roda(ロータ島)に渡り其南端突角より上流及び古岸即ち古開路の沿岸景色を觀賞す、毎年九月より約三ヶ月間は汎濫期として所謂濁流滔々 島の突角には有名な Nilometer (土語 Mykyas)あり、西紀七一六年 Caliph Sulei Man の命により初めて建設したもの、河水の高低を測定するの器で數回の修理を經て今日に及んだのである。

既にして此島を去り古開路に戻り 狹い曲つた土人町を通り抜けて El-Moallaka寺に行き戸外に立ちて案内を乞へば、敎育ある年若き瀟洒なる寺僧出でて應接し流暢なる英語を操り懇切に案内をしてくれた。後にサラーに問へば答へて曰く若僧は開路大學々生なりと、道理で上品な紳士で、開路の普通の坊さんとは雲泥の差があつた。

メンフィスの廢墟



此寺の平面は可なり面白く、先づ入口より廣庭に入ると、こゝよりは巾廣き階段によつて前室に通ず、次にまた中庭があつて最後に堂内に出るのである。此所では說敎壇と寄木の羽目とが注目に値した。見終りて外に出ずれば日は

既に傾きしも尚ほ暮るゝ迄には一時間餘りを殘せるを以て、フォスター廢墟の概念を得べく徒歩して行く。Fostat とは埃及に於ける回教國民の最初に建設し都會にして、五世紀の間繁榮と極めしが、一一六八年十字軍の侵入に遇ひ、甚掠奪を恐るゝの餘り最後のファチマ系カリフの爲めに燒盡され、爾來數百年間、さしも繁華を極めた大都市も、徒に開路市民の芥捨場と化して了つた、捨てた塵芥は山積して當時幸ひに燒け殘つた家屋迄も埋めて了つたが、最近七八年以前より大規模の發堀を初め、今では大部分が地上に現はれ、印度タキシラに於けるシルカップの様な小ポンペイ市を此所にも見出したのである、だから此所へ來れば此中世に於ける都市の有様を眼前に觀る事を得るのである。

此廢墟に通せる途を進むと一に事務所に達する、觀覽券は此所にて求め得べく傍ピアスタアなり事務事附近には東羅馬式柱並に無數の同樣式柱頭を植木鉢の如くに積み、化粧漆喰、陶器破片土器其他の出土品が夫れ夫れ分類しておいてある町の道路は不規則にて巾狹きも四通八達し、各家屋に設けられたる浴場及水道、飲用水を得る爲めの堀井戸、家屋壁の煉瓦の積み方、壁に設けたる小さき棚其他何れも面白きものゝみであつたが、就中石臼及油絞石と稱するものは甚だ興味があつた、殊に油絞石は其大さこそ全く比較にならぬが大和岡なる彼の有名な酒槽石及び其後同大字内出水發見の石造物を想起せしむるものであつたが、時既に晩く寫眞も實測も共に不可能であつたから更に他日を期して歸途に就かんとしたとき、一所について來た番人の頭が、サラーと何か二言三言話しあつてゐたが、聽て持つてゐた杖でとある煉瓦壁の入口の土をはね除けた、みると綠色樂燒燒物の形恰も我國の醬油注の如き古代ランプが一つ出た　サラーは默して夫れを拾ひ上げ隱しへ入れる　續て一つ、復一つ、合計三つ出た、出たのではなくて出したのである、あとの二つも隱しへ納めて了つた、私は少なからず驚いたが左あらぬ體にしてゐた、次に外壁を一巡する間に日は全く暮れたので愈引揚る事にした。

番人頭は途中迄見送つて來たが、サラーは心附として彼に五ピアスタアを與へられ度しといふ。此男は暴夜語以外は知らぬから、サラーを介して時々質問を發してみたが、説明甚だ親切叮嚀なので、申出なくとも若干金を與へんとしてゐたのだから、直に承諾して小銀貨を與へたれば、彼は職務の手前一度は辭退したが、サラーの勸告を汐に受納したのであつた。

此男と分れてから案内人は私に番人頭の事を次の様に語つた、『あの男は私の親友——彼はGreat Friendといつた——で極くいゝ男だ、先日ランプを頼んでおいたら此通とつておいてくれた、あれは頼むと何でもしてくれる』と、尚語をついで『も一人あれの仲間があるが、その男は性質甚だ頑固で不良性を帶びてゐるからいけない、併しアブダラは何といつてもFine fellowだ』と再び褒めたこゝいらでは、此位のことは不正とは思はぬのであらう、不正どころでなく、甚だ正當と思つてゐるのかも知れぬ、かくては金さへあらば。あの東羅馬式柱頭は勿論、完全なる柱を得る事も比較的容易なるべし、購ひ歸りて標本室に陳列し度きものなどゝ考へ乍ら步いてゐるうち、ハサン寺前停留場にきたので、こゝから例の如く電車で歸着したのは七時過ぎてあつた。

サッカラの一日

十月十八日　（水曜、好晴）

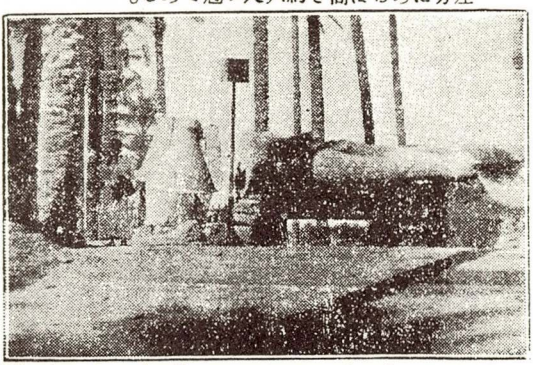
サッカラ行は汽車を利用するが最も安價なる方法であるが、時間の都合を考慮し家憲に違犯して自働車を雇ひ、ナイルを渡り一昨朝通つたギザ行の直路を約1哩進みたる所より左折し、再び左折してナイル左岸に出で、河に添ふて走る事約八哩、更に右折して Bedrashein の部落を經て約一哩進めば道路の左右は即ち Memphis の廢墟であるが凸凹甚だしき地表に壁の一部が出てゐる丈け、これは一九〇八年以降 Flinders Petrie 敎授監督の下に發堀されたのださうである。道路を進むこと幾何もなく北側に沿ひてラムセス二世の大像あり、Syenite（赤花崗岩）を彫刻したもので、一八八八年の發見に係る、身長約二十尺冠高六尺、背を下にして地上に在り。此處より少しく進めば左側池



メンフヰスに於ける人面獅子像

中に一九一二年發見の人面獅子像あり、アラバスタアを彫刻せしもので長二十六尺高十四尺、最も良好に保存せられ製作亦た頗る傑出してゐる。次に同じく左側の茅屋あり、内に同じくラムセス二世の大像がある、石灰石より成り長四十二尺あつたといふ事である。

棕梠林の間を通せる此道路の突き當りは土堤であつて、前面の耕地はナイルの汎濫せし漫々たる水を湛へ、此臨時の大湖に隔てゝ前方遙かにサッカラの部落を望み、其背景としては沙漠中に Pyramid（段塔）を初め數多の大小塔が點々散在してゐるから、其方から眼をはなさざる間に、車は遠慮なく全速力で堤上を進み行く、丁度我國の七月頃の氣候で、太陽はカンカン照りつける、だから薄着をして自動車に納つてゐると甚だいゝ氣持と同時に、金滿家の樣な氣持になつた。ほんとの金持乃至出張を命ぜられた人は、常にこんな氣分で旅行してゐるのだらう、併し貧乏な文留にはこれが空前の大奮發であつた、もう二度とあるまいからゆつくり走つてくれゝばいゝのにおそろしく早いのでつまらぬ。



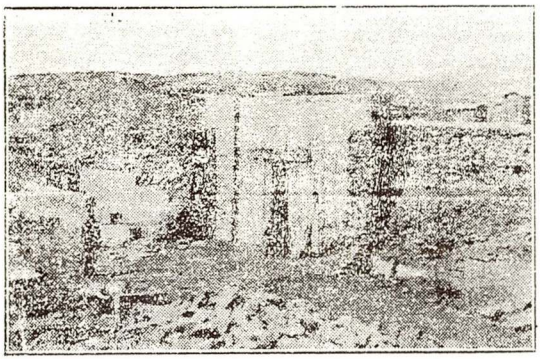
メンフヰス附近路傍にあるラムセス二世石像
左方にあるは高さ約六尺の冠である。

サッカラ墓地に入るや直に右折してTeti塔の前を通りMereruka の墓をみる、此は第六王朝（西紀前約二六二五―二四七五）

迄溯る事を得るもので三十餘室より成り、三區に分たる、第一區はメレルカ、第二區は妻、第三區は息の廟になつてゐる。

各室中最も注意を惹いたのはメレルカ立像のある大室で、中央六臺の大方柱の間には犧牲の牡牛を捧ぐる爲めの臺がある、此室にてメレルカ像の寫眞を撮つたが惜しい事に失敗をして了つた此室のみならず殆んど總ての室には壁に薄肉刻彫があるから、各室何れも甚美事である。

サッカラ所在メレルカの墓入口



これより元の道へ戻る間に車は砂に埋まりて動かず、忽ち何處よりか服裝の賤しき男二人出で來り、運轉手と共力して砂を堀り漸く運轉の出來る樣にした、此の內の一人は村のヘッドマンださうである、してみるとこれこそ眞の Sheikh el-Beled である、博物館のと大分に違ふと心の中で思ふ、澁紙で貼つた樣な顏に白木綿の鉢巻をして、煮〆た樣なヨレ〳〵の衣を纏ひ跣足である。彼は眞僞不明の古物——貨幣、甲蟲等——を取出し、買はん事を勸めたが、眞僞如何に係らず購求の意志なきが故に拒絕をし、ザラーをして心附の金を與へしめたところ、彼等は默禮して其まゝ何れへか退却して了つた。

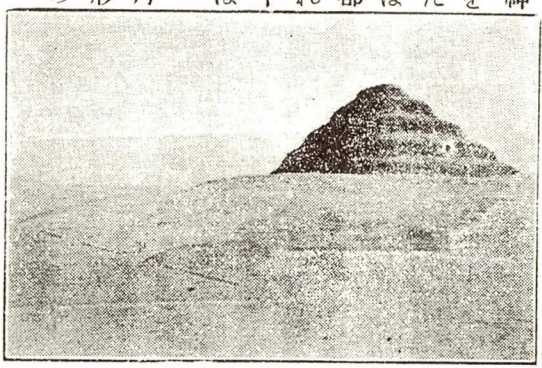
斯く進行すると車は再び砂中に埋まつたから、そこで乘りすてゝ徒歩段塔の傍を過ぎマリエット、ハウスに着して椽に休憩した　此處へ達する途から北方遙に Abusir 及 Giza の寶形塔を地平線上に望み得べし。

涼を納れた後 aMastba of Ti に向つた、此墓は第五王朝(西紀前約二六二二—二四七五)の初期に當り、時の大官にして兼て大地主であつた Ti ので、元は地上に營みたるものであるが、長い年月の間に全く地下に埋まつて了つたのを、マリエットが發見發掘し、埃及

考古局の監督の下に修理を經たのである、此墓の壁の薄肉彫は古帝國時代美術の最良にして且つ最もよく保存されたものゝ一つであつて、其壁には犧牲牛の屠、殺鳥料理、鷲鳥及鶴の飼養、船遊び建築工事、造船、耕作播種、事務室の光景等多種多樣の彫刻がある、こゝこそ仔細に觀察せば數日を費すの價値は充分にある。

次に見たのは Serapeum である、一八五一年マリエットの發見するところ、これは牛の墓で、通路の兩側に室を設けこゝに大石棺を置く、側室の數約三十、內石棺を存するもの二十、一個は蓋と身と位置を異にして通路に橫はれり。殘存せる石棺の全部をみたのではないから、全體然るか否かを知らぬが、棺のあるものは黑花崗水磨で、蓋に突起を缺ける他は、其形我國の古墳に普通なる所謂「家形」のものであつた。

埃及では古來各種の動物が禮拜された、即ち牡牛、牝牛、鰐、猫、獅子。Ibis(アイビス一種の鳥)、鷹、兀鷹、牡羊の如きものであつて、例へば Horus は鷹、Thout は Ibis、Sobek は鰐、Khnum は牡羊の形をとると信ぜられてゐたから、從て此等の動物が禮拜されたのである。右の外古代より特種の斑紋を有せる動物を尊崇した、從て此特種の動物を神殿に飼養し、死後は莊重盛大なる儀式を以て叮重に埋葬し、更て其神殿內には代りのを飼つたのであつた此種の著名な例はメンフキスの古都に於いて禮拜されたる神聖なる牡牛 Apis で、其資格は黑地に白點あり、前額に白色の三角形、右脇に新月形の型を有するものであつたといふ。

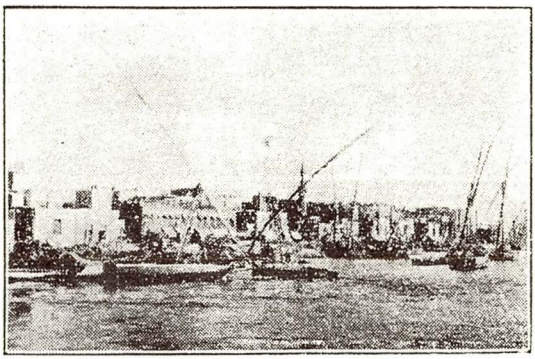


サツカラの段塔

前記セラペウムは即ち此等の牛の墓である。

時間も可なり經過したから、も一つ Ptahhotep の墓が殘つてゐるのを割愛し、再び段塔の傍を通

り歸路はギザに出たが、途で三度土堤の砂に車が埋つたので、運轉手は大に努力して砂を堀り石木端を飼ひ、將に發車せんとしたときに、群がり來つた土人十數人後方より車體を押したれば車は難なく運轉しだした。埃及に於いては、斯樣な事が何度もあるから、多少のエキストラを考へておかねばならぬ　印度でも自動車が河渡りをするが、これは橋のないところを渡るのだから、渡る方が惡い、だから土人が出て來て押し渡したら、金をやるのは當然であるが、埃及のは途が惡くて車がめり込むのである、馬鹿氣てゐるが止むを得ぬ、こんな始末で大分の時間を空費し



ローダ島よりナイル右岸舊開路をみる

開路市へ戻つたのは午後三時であつた。

市中の洋食店で簡單に晝食をすませ、舊開路に Abu Serga 寺をみた、此寺は回敎徒の征復以前の創立にかゝると傳ふるも、地下室のみ或は然らん、傳說には聖母幼き基督を拘きて此處に逃れ、此地下室に一ケ月を過したといふ事である。恰も今はナイルの增水にて地下室は一面の水で、到底入るを得ざるを以て、上から覗いた丈けであるが夫れでも Nave と Aile とに分れてゐるの丈けは分つた。此の寺今は全部復原修理を經てゐる。

今日も亦歸途 Fostât へよつた、目的は例の油絞石の實測と寫眞撮影とにあつたのである、然るに案內人は私が油絞石を見度いといふ意を解せなかつたゝめ、漸くそこへ行つた時は最早晩くて寫眞が撮れなかつたから、更にもう一度出直す事にして歸宿をした。朝は自動車で堂々開路市を乘り出したが、夕は電車內へ立往生、洵に槿花一朝の榮を染々と感じたのであつた。（つゞく）

汚水淨化裝置に就いて

（二）

工學士　米元晋一

（四）現今行はるゝ種々なる汚水處理法

私は現今行はるゝ種々なる汚水處理法を說明するに當て（三）に於て述べた汚水處理の順序と對照するに便利と思ふから玆には（第一）「タンク」處理法（第二）濾過或は酸化處理法の二段に別て最も普通使用せらるゝものに付て概要を說明することゝする。

第一　タンク處理法

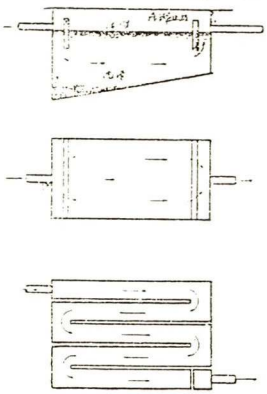
此處理法の主な機能は汚水中に混在する所の重い固形體を沈澱し又輕い浮揚體をも液體と離別さすことであつて、此處理法はタンクの設計及運用の如何に從つて沈渣（或は沈澱滓）を更に進んで槽底で嫌氣菌の作用に依て消化減滅さすものと然らざるものとの二樣ある。而して此タンク處理法を行たのみでは汚水を大量の水體中に放流する場合の外後次腐敗を惹起するから完全處理法とは言はれないのである。

（イ）單沈澱槽（或は池）

之は單に汚水中の輕い固形體は水面に浮揚り重い固形體は水底に沈澱する樣に汚水を極めて緩速度で槽池内を流通さすものであつて其標準的の構造

例は左圖の如くである。

圖中浮滓止板は水面に浮ぶ所の輕い滓を沈澄水と一緒に流出せしめないために流出管の前部に挿置したものである。



單沈澱槽又ハセプチック、タンク

此種の沈澱槽では槽内を流通する速度を適度にすれば固形體を七〇パーセント位は沈澱さすことが出來るが水面に集まる浮滓（ふさい）や水底に堆積する沈渣（ちんさ）は頻繁に除却しないと嫌氣菌に由る分解作用のために水底から瓦斯を發散するからして上部の沈澱水を不潔にする。而して屢々除却すべき沈渣は未腐敗狀態に在るがために粘性で惡臭を帶び且含水量甚だ多く從て其乾燥は容易でない。加之之が運用上監理人を必要とするから都市の取纏めたる汚水處分場への應用は兎も角住宅又は小人數用の汚水處理施設としては應用し難いものと思ふ。

（ロ）セプチック、タンク（淨菌槽）

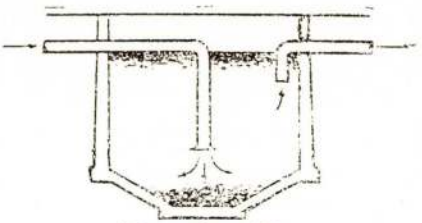
セプチック、タンクは其構造上の點から言へば殆んど單沈澱槽と異る所は無いのであるがタンクの容量を二十四時間乃至四十八時間分の汚水を容れる位の大さとなし屢々掃除して浮滓や沈渣を取出さない點で卽ち運用法の上で相違するのである。セプチック、タンクの主たる目的は沈渣や浮滓を嫌氣菌の作用に委して成るべく分解醱酵さして殘留沈澱物の容積を著しく減少することと其除却及乾燥中に惡臭を發散するのを防ぐためである。此型式のタンクは一八六〇年頃始めて佛國で考案せられたものである。卽ち住宅に接して地下に密閉溜を造り之に排便管を連絡し屎尿を排除するのであつて其排便管の下端と溜と下水管との連絡管上端とは何れも溜内水面以下若干の深さの所に取付けて腐敗瓦斯が下水管から溜の中へ又溜の中の腐敗瓦斯が排便管を通じて家屋内に入込むことを防ぐ方法となつて居たのである。此セプチック、タンクが市の下水處理に始めて應用せられたのは一八九〇年英國のエクスター市である。

當初此セプチック、タンクは沈渣(有機性)の全量を瓦斯及液體に消化し盡すかの如く考へられて居た樣であるが其後の經驗及實驗によつて其說の誤謬であつたことが證明せられた。乍併タンクの中で沈渣は相當消化せられて容積が減少することゝ汲出し乾燥處理が單沈澱池に於ける其れよりも大に樂で手數が比較的掛からないと云ふことは間違の無いことである。即ちセプチック、タンク內で消化した沈渣は新鮮な沈渣に比較して其性質が密實(水分を含むこと少い)となり又乾燥に當て水分を離脫することが容易となり其結果處理すべき汚い沈渣量を減少することが出來るのである。凡そ單沈澱池に生ずる沈渣量に比べて二割乃至二割五分迄に減少するのである。斯の如くセプチック、タンクは一方に於て沈渣の容積を大に減少さす利益を有するが他方に於ては槽底での絶へざる分解のために不潔瓦斯を放散するから上部の沈澄汚水が汚穢せられ又膠狀物質を含むに至ると云ふ欠點を伴ふのである故にセプチック、タンクから流れ出る汚水は黑色味を帶びて居り之を攪拌すると惡臭を伴ふものである。

之に依て見れば住宅若くは小人數用の汚水處理に此セプチック、タンクを家屋に接近して使用する場合には汚水處理施設を直接外氣に觸れない樣にし且內部の通風を良くする工夫を講せねばならない。若し通風の佳良を謀り又流出汚水を攪拌しない樣な灌注濾過法を用ひ且膠狀微細物が流出しない方法を加へることが出來るならば此タンクは沈渣量を減少することに由てタンクの掃除を爲す手數を要することが少いから住宅用として應用するに足るものと思はれる。

(八)バイヲリチック、タンク

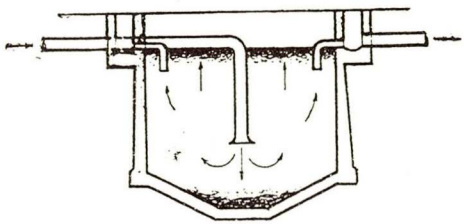
之はセプチック、タンクに對する一種の更改型であつてセプチック、タンクよりも沈渣量を一層消化減滅する作用を有するものである。タンクの構造は大要次圖の如くタンクの形狀を深い方錐狀又は圓錐狀となし汚水の流入管端を底に近く突込んだものである。此種のタンクは既に一八八五年頃から獨逸で行はれたドルトムンド、タンクと同樣であがる之に依て沈渣量を大に減少し得ると云ふ



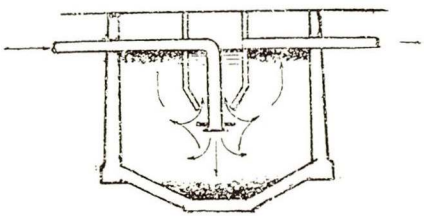
（垂直流）

信念と理論とは最近に米國のマサチユセツツ科學研究所（インスチチユート・オブテクノロヂー）で發表せられたのである。其理論は次の如くである。普通のセプチック、タンク内では沈渣の堆積と之に次で起る處の分解生産物の堆積相重なると普通の分解方法即ちバイオロリシス（バイオロリシスとは有機體が分解に依り液化又は瓦斯化する行程を謂ふのである）を妨げるものであるからタンク内の沈渣が絶へず攪拌せられて其分解成生物が絶へず除去せられ之に新たな沈渣を供給するならば結果する所のバイオロリシスは一層速かに且完全に行はれるのである。此信念から出發してタンクの形狀を深い方錐又は圓錐狀として汚水流入管を水中深く挿込んで汚水が流入する毎に沈渣を攪拌さす樣に試みたのである。此方法は實際に試驗して果してタンク内に堆積する沈渣量を大に減少することが出來たのであるボストンで同一狀況の下で比較試驗をした成績に依て見るのに普通のセプチック、タンクでは沈澱沈渣の消化量（乾燥體に付きて）は平均四割位であるのにバイヲリチック、タンクでは約八割位の消化力があつた。即ち消化力は二倍以上を持て居ると云ふことである。此タンク樣式を私が使用したのは相州茅ヶ崎南湖院の汚水處分であるが西原氏の特許六一三五四號型は東京で五箇所、大阪で一箇所何れも普通のセプチック、タンクよりも沈渣量も浮滓量も少く且つ流出水も比較的良好で（第二）次濾過床に對しても非常に具合が宜い樣である。

此タンクでも上部の清澄汚水は下部の沈渣分解のために發散する腐敗瓦斯のために多少汚穢せられることは免れないが住宅に接近して之を設ける場合には前述の通り上に密閉蓋を施して換氣作用に注意するならば實用に適する良好の沈澱槽と云ふことが出來る唯其の缺點を言へば槽が深いから施工上の困難を增すこと、小規模のものに對しては構造が稍複雜過ぎることである。



ばいをりちつく•たんく



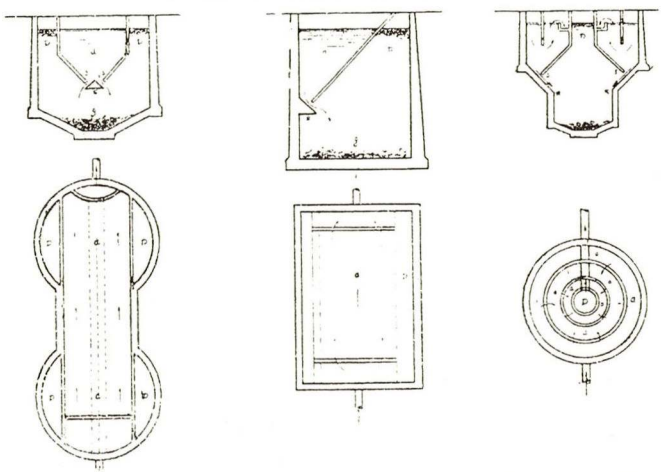
西原式はいをいちつく•たんく
（特許六一三五四型）

（二）イムホフ、タンク

近時セプチック、タンクを都市下水處理に應用することに對し漸次批難せられる樣になつたが其理由は其沈渣の分解に伴つて惡瓦斯を發散して之が上部の汚水中に溶解して汚穢せらるゝこと及其分解のために微細固形分を浮揚げて之が流出汚水中に混合するから後次處理即ち濾過作用を受けさす場合に惡臭を發散すること及始めに豫期せられて居たよりも割合に膠狀質を帶びて居る浮泛微細物を混合排出するから濾材や汚水灌注裝置に惡影響を及ぼすことが明つたからである。

イムホフ、タンクは此缺點を除くがために考案せ

イムホフ、タンク



a 沈澄槽　S 間隙

g 沈渣槽　R 反潑体

D 浮滓槽

られたものであつて一九〇七年に獨逸のドクトルイムホフ氏に依て考案工夫せられたもので特許になつて居る。此タンクは二個の原則を遂行さす樣に出來て居る。即ち上部清澄汚水が槽底の沈渣及水面の浮滓のために成生せらるゝ瓦斯に接觸しない樣にし之と同時に沈渣や浮滓をして充分に分解作用を營ましめて沈渣量を減少さす樣に構造せられて居るのである。即ちセプチック、タンクの長所を助長さすと同時に其缺點を除く樣に出來て居るのである。此タンクの構造は次圖の如くなつて居る。

其運用法は汚水が沈澄槽(a)を極めて緩速度で流通しつゝある間に其抱含して居る固形體を重力作用で大部分沈下して沈渣消化槽(g)と(a)との境界部にある間隙(S)から(g)槽内に沈降し又沈渣が分解して浮揚がる所の輕き浮滓は浮滓槽(D)内に浮揚する。又(g)内で發散する瓦斯は反發體(R)のために反發せらるゝから(S)を通じて(a)内に侵入することは出來ないのである。又(g)槽の内容量は甚だ大きく造られてあり且つ水深が約二十七八尺以上となつて居るから沈渣は約二氣壓の壓力を受けて居る分解作用の增進と壓迫とのために沈渣量は大いに減少する許りでなく瓦斯を溶解して居るから水分を含むことが割合に少く且つ質量が輕くあつて非常に粘着性を失ひ之を(C)管から水壓の下に扱出して乾燥さすのに手數を要することの少い利點を有て居るのである。此タンクで沈渣消化減少や其乾燥容易なことに付ては尙詳しく說明せねば之を詳にすることは出來ないのであるが茲には以上の說明で止めて置くことにするイムホフ、タンクは都市下水處理に相當廣く應用されて居り又住宅用及小人數用の汚水處理にも應用すれば好結果を來すことが出來ると思はれるけれども大なる浮泛物を沈澄槽に引入れぬ工夫を要するのと又槽を可成り深く造らねばならぬことゝ尙又構造が相當複雜である缺點を持て居るから小規模のものに應用するには果して經濟上及實用上から考へて有利なるか否かは疑はしいのである。

我邦で此式を應用した例は神奈川縣川崎町の東京電氣株式會社の水便所汚水の豫行處理のみの樣に

考へられる。

(ホ)藥品沈澄法

此方法は住宅用又は小人數用の汚水處理には應用出來難いと思はれる。其理由は運用に一々藥品を注入し又之を監理するのに手數を要するからである。

第二　濾過法或は酸化處理法

此處理法の主な機能は汚水中に溶存する有機體を酸化して之を水體に放流しても最早や後次分解を進行せしめない樣にタンク處理を受けたる汚水を更に定着性の無害の液體に變化さすことに存するのである次に說明する處理法の淸淨効率は都市の下水處理では何れも六〇乃至七〇パーセント位は持て居るのである。

(イ)灌田法

若し汚水其他の有機體が地上に薄い層で撒布せられて酸素が自由に吸收せられる樣に空氣に曝露せらるゝならば土質中に棲息する或種の微生物が之に働いて細菌的化學的酸化作用を行ふて汚水中の有機體を不活性の無害なるもに變化するものである。此原理は後日に至つて究明せられたのであるが此原理が不知の間に汚水處理に利用せられたのは實に灌田法であつたのである。灌田法は單に汚水を間歇的に耕地面に灌漑して汚水を淸淨處理すると同時に穀類野菜を培養するのであるから一見有利な方法と考へられるけれども廣大なる而かも粗鬆質の土地を必要とするから現今では都市汚水處理に對しても應用出來難い樣になつた又住宅若くは小人數の住宅團地附近で廣い地面上に時々汚水を撒布曝露する如きことは頗はしく無いから普通の住宅汚水處理法としては不適當と思はれる。

× × ×



古寺巡禮（其二）

池田谷久吉

久安寺

北攝の野に古美術の精華として異彩を放つてゐるものは細河郷の久安寺である。

昨年の秋の初め頃一度行つたが、もう日足の短い陽は暮れかゝつてゐたので、うすがすみの中にかすかながら樓門のアウトラインを眺めた印象だけを持つて歸つたので其後是非一度更めて、ゆつくりと見たいと思つてから約半歳の月日は經つた。

寒い北風が毎日續いてゐたが、漸く止んで珍らしく暖かになつたので兼てからの希望の久安寺行きを決心して○氏と出掛けた。

梅田の阪急前で時計を見るともう意外にも一時半になつてゐたので、また今日も駄目かも知れないと怪しまれたが折角こゝまで出掛けたものを今更引き返すのも殘念だと思つて兎に角電車に乘つた。

春の陽はガラス窓を透し通して暖かく車内に投げかけてゐた。たいくつまぎれに持ち合せの新聞を讀んでゐるといつとはなく、知らず〳〵にうと

〳〵眠りを催しかけて心持よくなりかけた頃池田の停留場に着いた

池田は流石、北攝の都である、貨物の集散地である。古い切妻の土藏造りの商家が軒を列べてゐて盛に活動してゐる、この地、特産の炭、柑橘を商つてゐる店が大部分で荒物屋、乾物屋だとかいつた所謂在所向の商家がその中に綴々としてゐてその軒先には飛脚の車などが列をなしてゐるなどがどこの田舎街にも見受ける一種のローカル、カラーとして面白いシーンである。

猪名川の川面はもう煙つてゐて、堤の榎の樹は漸くに長い冬の眠りから醒めて若芽が萠え出ようとして冴え切つた美しい川水はなまぬるさうにしかも緩やかに瀬々らいでゐた。

一重列べの家並端れから京都龜岡街道が分岐してゐるのを東へ辿つた、〇氏は長いコンパスに左に寫眞器とその脚とを持つてゐるので丁度それが右振子の代用？反動をつけて馬鹿に歩みが早い。

騒がしい都會から景色は一變して急に靜かな片田舎に出た、右手は池田山の雄姿、左手は久安寺川を南北に挟んで小さい平野が東西に擴がつてある、街道の左右はこの邊一帶の名物たるいろ〳〵の植木畑があつて人通りの多いところだけに道が大變に研げてゐるので、このまゝ堺筋か本町筋へでも持つて行けば近頃盛んにやつてゐる路面の補裝工事のコンクリートや木煉瓦は要らなさそうにさへ思はれる。

池田から二十町も行くと久安寺川に沿ふ樣になつてゐる、そこの四ツ辻には藁葺の地藏堂があつて珍らしくも香が焚かれてゐる古寺巡禮者を一層その域にひきつける。こゝまで來ると近くの山迄は七八丁位で石屋の職人は五六人、河原で丸い石を眞二つに割つて道の傍まで運び上げて、たくさん積んでゐた、こゝまで停留場から約三十町もあるので歩き馴れない足にはかなりくたびれかけてゐたが突き當りの向ふの低い山の尾に久安寺の樓門の屋根の甍が凛然とした偉容をかすかに現はしてもうすぐだな、と思ふと俄に新しい元氣が沸き出て來た。

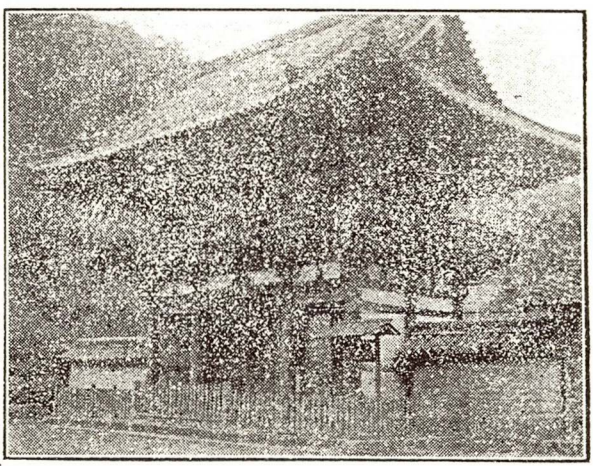
小さい峠を越すと伏尾といふ細河村の小字に出

てこゝの久安寺川に架けられた吊り橋を渡つて少し登り坂を二丁も行くと丹塗の豪壮な樓門の前に出た。

周圍が餘りに狹くるしいので充分の距離を遠ざけて心ゆくまで觀賞することの出來ないのは殘念であるが道端の段石の上に立つて見ると軒先の美しいカーヴを見上げてゐると珍らしくプロポーションのよい、しかもステーブルな感が己にファストインプレションとして腦裡を獨占して終つて、更に或る威壓をさへ感じた。

尙もわれ知らずうつとりとして見てゐるともう建物全體に自己といふものを、いつとはなしにすつかり釘づけにされてこの大藝術が宇宙大自然の中に創建當時の國民思想を、時代思潮を沈潛の裡に最も雄辯に物語つてゐる事が無限の價値を感せしめると共に番匠の全生命を捧げて眞實を然かも熱烈な宗教的觀念と藝術衝動、欲求の努力とが偲ばれてそこには汲めどもつきぬ生命の泉に出逢つた樣な強い歡喜を感じさせられた。

そもこの樓門の創建に就ては久安元年近衛天皇の再興したものだと傳へられてゐるが樣式、構造手法等からは室町中期のもので當時の遺物としては優秀なものである。



久安寺樓門

梁間二間半、桁行四間半棟高三十六尺、三間一戸といふ樓門で屋根は入母屋造りの本瓦葺で柱は凡て丸柱に總丹塗を施し、軒は二軒で組物は上層及腰組とも三手先を用ひ中備は何れも斗束を配して四方には勾欄付廻廊を繞らしてゐる。

三戸の中中央間の虹梁上には簡單な蟇股を用ひ各部全體が鎌倉の樣式を巧妙に踏襲してゐる。

此の樓門の特色として注意すべきは概して木割雄大に、然かも比例よく整ひ、デテイルが自由に出來てゐる外、正面兩脇間には頭貫と飛貫とを用ひて飛貫は中間柱を通り貫きて挿肘木の如くに見せかけて中間の頭貫を支へてゐる、又中間の頭貫を虹梁に作つてその兩脇間の兩端が側柱を貫き通して木鼻に繰形を用ひてゐる。また兩脇間の前面を吹き放しとして後に金剛棚を設けて傳運慶作の仁王が立つてゐるが大したものではなさそうに思へる。

餘り多くの人達に知られてゐないこの片山里にこんなよく整つた調子のよい、ごつしりとした建物のあることの意外さに驚かされずにゐられなかつた、O氏はこゝへ着くとすぐにあちらく廻りこちらへ廻りなどしていろ〳〵苦心の上寫眞を撮つてゐた。

私達の希望はいよ〳〵興奮して胸をおどらせて來た、それはプログラムの第一たる樓門の幕は閉ぢられたが次に期待してゐるこの寺の持つ唯一の國寶たる阿彌陀佛の拜觀であつた。

古びた小さい門の潜りを這入つて庫裡の玄關に來意を告げると四十餘りの坊樣が出て來て玄關の次の間の應接室に案内して呉れた、お寺には不釣合な椅子と卓子とが備へられてゐてしかもその隣りの部屋にはたくさんの書籍や雜誌や掛圖などがきちんと置かれて一方の壁には軍人の肩章の模型や鑛物の標本などが陳列されてゐた、丁度小學校の書庫理科教室の樣な感がした。と共に直覺的に田舍に有り勝な今も尙お寺は教化の中心といつた樣に青年會などの事業に使用されてゐるのだといふことがわかつた。

この邊一帶は大澤山といつて高野派に屬する一大靈場で神龜二年に行基菩薩が地主大權現の祈願によつて開山した後、聖武天皇の勅命に依り安養院と號し、當初は律宗であつたそうだが今は高野派古義眞言派に屬してゐる、然しこの安養院は現在の久安寺ではなく池田からの途中、地藏堂附近にあつたそうで、當時は寺尾千坊といつて千ケ寺

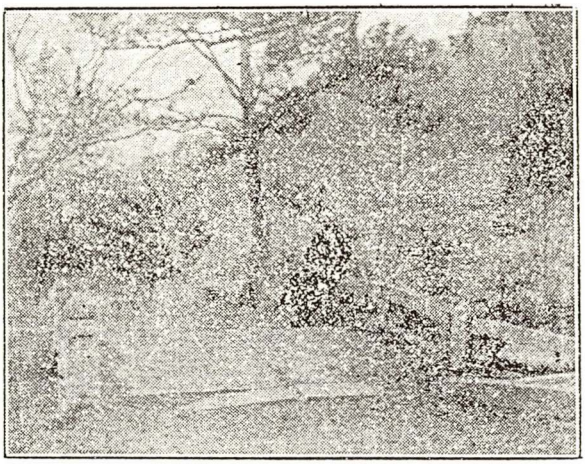
もあつて上寺尾、中寺尾、下寺尾と三つに分けてゐたが皆燒失して終つて漸くに上寺尾――内院が即ち現在の久安寺でこゝにも五十餘りの坊が殘つてゐたらしいが保安六年に全部烏有に歸した、其後近衛天皇兼て御安產の守護尊として御祈願あらせられてゐたので久安元年再興造營され、久安寺の勅額をさへ賜はり現在の土々呂岐村と細河村とを寺領に賜つてゐた。文祿年間朝鮮征伐に際してその軍用金として寺祿十三ケ寺分を返上し爾來明和初年迄は三坊を殘し維新に至り漸く二ケ寺を殘して今日に及んでゐる。當時本堂は樓門から約三丁程北へ突き當りにあつたが庫裏との關係上現在の位置即ち庫裏のすぐ北側に南面して移轉してゐる。

樓門は明正の頃左甚五郎に依つて檜皮葺を瓦葺に葺き替え其の節軒の出を一尺四寸餘りに切り取り、また柱の根繼ぎなどの修補を加へてゐるなどと坊様はいろ〳〵の話を愛想よくした上で、いよ〳〵佛像を安置したところに案內して呉れた、導かれるまゝに行く途中、近頃諸所のお寺へ國寶を盜みに忍び込む泥棒が多いので誰れも氣付かないところに安置して勿論誰にも拜觀させない様にしてゐるとか、うんと勿體をつけてゐた、その場所は本堂と思ひの外全く別な建物の隅の方だつたので驚かされた。

うすい暗い狹くるしい中に豊滿な體軀を持つた阿彌陀如來の座像は端然としてゐた、四尺位の木彫でふくよやかな顏、寫生的な眼、細い弧を以て描かれた眉、垂れ下つた耳朶、丸味を帶びた頤等は宛然天平時代の女性美の理想を表現したものと合點が行く（作者は行基菩薩と傳へられてゐる」

私達は上品上生の御相の崇高さ、しかも富麗、高邁な氣品に暫くは醉はされてその昔、衆生を西方極樂淨土へ來迎したそのまゝを想像させられるだが左手の手首のあたりのカーヴが稍古拙な技巧と全體の比例とは少し適はしからぬことゝ、光背と臺座とが全然時代が違つてゐるのが惜しいものである。光背は駄作であるが蓮臺としてはその隋圓形と楕圓の奇抜なのが珍らしいものである。其他般若心經、大五鈷等が寺寶として保存され本尊

十一面觀音は古來秘佛として本堂厨子内深く秘められて宗教の尊嚴を犯さずとあつて見せては呉れなかつた。



時計を見るともう五時を過ぎてゐたので庫裡を辭した、坊樣は茶菓子の代りだといつて佛教宣傳のパンフレットを呉れたので有難く頂戴した。

そして古い伽藍の跡をせめてもと奥へ行くと蓮池があつて勾欄付の石橋があつて哀れ冬枯れの淋しさに八功德の水はなかつたが池の中の島には高祖の碑らしいものがあつて一しほ哀愁を感じられる。

左手には雜木林の山高く北の方へ廻つてゐて右手は川を隔てゝ、漸くに拓けてゐた、本堂の趣は一段高く石垣もて積み上げられて、利殖の道に抜目なく杉の早苗を一面に植え付けてゐたのには云ひ知れぬ今昔の感を深うした。

寫眞を撮りかけたが山里の黄昏は一しほ早く暮れたので急ぎ走りに歸途に就いた。

田舍にも物質文明は到るところに威を逞うしてどこの家にも電燈は點ぜられてゐた、池田の街は晝の賑ひに替へて戸毎は最早や戸を閉ぢて靜寂に歸つて、街頭の電燈のみは淡闇の中をおぼろげに照してゐた。電車に乘ると寶塚からの温泉歸りの遊覽客が浮かれてゐたのが疲れたものに淋しい、一つの刺戟であつた、梅田へ着いたのはもう八時をすぎてゐた。

おゝ騒がしき都會の巷！

私達の古巢は苛立しい生命の象徴を廣告塔の電燈の明滅に表現してゐる。（終り）

滿鮮紀行（三）

波江悌夫

四月廿七日（晴）

旅順行

今日は強行軍である。午前七時半大連發の列車で旅順戰蹟を訪問する日であります。谷君を除いた一行は御案内の諸君と一所に無事車窓の客となりました。

此に大和尚山の雄姿と、日露役に有名な南山の後影を見送つて、ゴロ〳〵する間に右手に勃海の白波を迎へてゐました。大連土地會社の城君の御話によると今に此海岸に立派な海水浴場が出來るだらうとの事でした。明日は城君の御案内で老虎灘や星ヶ浦の海濱を訪問する日程であるさうな。

沿道は山亦山の谷間を進む、山脚痩凹して楊柳の外樹木らしいものはない。しかも畠は到る處耕されて點々村落の隱見する邊、桃李花笑ふて三々五々青服の農夫の姿、輻の繪巻物を眺める心地がするのでした。

柳樹房を過ぎて間もなく旅順本防禦線の連山が低く吾等の眉間に現はれて來た、右手に水師營の村落を教えらるゝ頃は軌道は既に松樹山下の谿谷を走つて居ました。高崎山、赤阪山、そして再靈山、倚千山、やがて露人の墓地を過ぐれば列車は白國山下を廻つて旅順の驛にはや着いたのです、將に九時半。

白玉山

關東都督府からは金井理事官、近藤技師其他の諸君が出迎へられました　一行は挨拶もそこ〳〵に又茲でも支那馬車の御厄介になつたのです、一鞭を擧ぐれば白馬紅駒相次いで坂路を登る。松樹移殖せられて既に數年、白玉山は青々として吾等

を迎ふ。途次閉塞隊勇士の忠魂碑を詣して、行く〳〵旅順の縮圖は吾等の眼下に展開せられます。山上の納骨堂に參拜しました、堂は舊砲臺の上に安置せられたといふ事です。實にや白玉山は旅順諸砲臺の中軸であります。

御案内の說明役某君は當年の防禦陣地を指呼點々して熱心に語られる。最近都督府の土木課で各砲臺の上に記念碑を建てられてから見學の旅行團は一望の下に大パノラマの戰跡を腦裡に畫く事が出來るのであります。右手に突兀として高き望臺を越えて大頂山の記念碑も針の樣に見える、針金の樣な鐵道線路、布を曳いた樣な龍河の彼邊に水師營の村、大小案子山、椅子山の上に爾靈山の白が吾々の眼底を射ります、そこにも針を植えた樣に立つた記念塔、眼を轉ずれば新市街の白壁紅瓦綠樹の姿、遠く霞む老鐵山、近く靜なる老虎尾半島、そして樋を伏せた樣な黃金山、一帶の海岸砲臺が、天を摩すばかりに立つ白玉山表忠塔の後へに控へてゐるのであります。

天日高く暖かく額に汗して一行は導かれるまゝに表忠塔下に位置を移せば眼下に舊市街の黑煉瓦町や池の樣な東港、そして狹い〳〵有名な港口が模型の樣に延べられてあります。文明の古戰場はあまりに廣々としてしかも田野遠く開け、十年の歲月は綠樹よく繁殖して滿山を掩ひ盡さんばかり況んや軍事上の智識なき吾等の頭には茫漠として夢の樣な氣がしました。

二〇三高地と其高さを爭ふ記念塔には登らず、一行は乘馬車の客となつて舊市街を過ぎて、記念品陳列所を訪問しました。此所には眞に當年の俤を偲び得る慘澹たる戰跡の遺留品が收集されてありました。破壞せられた大砲小銃軍旗武器の各種各砲臺の模型、彼我軍將の法繪、そして戰雲漠々たる實寫眞、何れもが戰慄を禁じ得ないものばかりでありました。時計　軍帽、從軍記章、そして手帖鉛筆の類は白骨を見るより以上の物語を藏して居る事でせう。

東鷄冠山諸砲臺

頭が妙になりました。一行は小流に沿ふて東に向ひます。朝鮮人町の白衣點々流に洗濯する姿に興をそゝられながら、砂塵をあびて東鷄冠山の砲

臺へと登ります。右手の山腹に諸々岩壁の破裂した様な跡を見し砲彈落下の物凄さを感じます。峠を西へ廣々とした通路を通れば、舊旅順の土壁の跡があります。

馬車を留めて一行は山を攀ぢます、其處此處に落下したコンクリートの大塊を指されて、東砲臺の爆破の名殘であらうと聞いて驚きました。そして頂上に登れば露軍自身で破壞したといふ砲臺跡は全く目茶苦茶です。無心の『タ ポヾ』『スミレ』の花が咲いてゐる邊り死屍は纍々であつたのでせう。

大小孤山の麓から西へ延びた平野は一面赤く黄に褐色を帶びた畑が太平を樂む農夫の手に開耕されて居ます。圍山子山から大頂山へ亘る山麓には村落が點々として散在して居ります。東鷄冠山北砲臺に到つた一行は此處の砲臺の中を見學して所謂化物屋敷の戰跡の猛烈至極なのに開いた口が閉ぢられないのでした

コンドラチエンコ將軍の戰死の跡を弔ひながら一行は晝食の御馳走を頂戴しました、ビールやサイダーを呑みながら當年を偲ぶといふ條、十年一昔となつて太平の民は、頭の中に戰史の頁を繰る餘悠がないので、熱心な說明役の悲しい物語を一々呑むには餘程の骨折でした。

肉彈の著者が突擊奮鬪したといふ盤龍山砲臺や最後迄露軍の抵抗したといふ望臺や、大爆破を敢行されたといふ二龍山砲臺や戰跡として有名るものが此山續きに望まれます。だが此等の山々は皆丈餘に延びた松樹が春の綠を湛へてゐて、涼風は汗ばんだ一行の額をなでるので何となく呑氣になつて、大分睡くなつて來ました。

爾靈山

馬車は今迄來ました路を逆もどりして洛路を降ります。白塵烟の樣に揚がつて夢を迫る一行の顏を包みます。しかも馬車は遠慮なく馳せて新市街に入ります都督府前を過ぎて一行は二〇三高地に向ひました。町外れに露西亞式の煉瓦住宅の散在してゐるのが一行の注意を惹きました。

山麓で馬車を待たして急阪を登らねばなりません。戰跡訪問も決して樂な事ではありません。赤阪山麓の鞍部に記念品を賣つて居る茶店が二軒あ

ります、此處からは松もない峨々たる山骨を攀ぢてゆつのです。山頂には二頭あつて高き方に砲彈形の記念碑が建てられてあります。乃木將軍の書『爾靈山』の三大字を見て一行は襟を正さゞるを得ません。說明によると山頂の花崗岩は彼我の砲彈のために碎け且燒かれて塚石散亂、白烟濛々として山を覆ふたといふ事です、戰後死灰堆く風に依つて時に烟の樣に立昇つたそうであります。

鐵血爾靈山改形

とは實に慘澹たる實狀を述べられ不朽の文字でせう。露軍は手頃の碎石を爆彈に代用して我軍を苦しめたそうであります。

Ｌ領後海軍砲監測所の跡といふ岩の割れ目、露軍の將校が味方の退却するものを屠つたといふ鞍部、そして西側の八合目に布の樣に穿たれた塹壕を、一巡して忠魂碑西側の臺下に一行は小憩しました、支那產の梨果を食べながら皆無言に松の綠の山麓を眺めます、高崎山から南へ波の樣に靑々とうねる連峰を見廻して更らに眼を擧ぐれば勃海の波靜かに烟つて遠く霞むのでした。

ふと近く塹壕の下の松林に一つの白標を見出した人が何んだらうと不審を打ちました、それは小乃木さんの戰死の跡でした、將軍の命によつて一度は取除かれたのですが、將軍の永眠後再び永久に建てられたそうです。そしてそれは直ぐ吾々の眼の下に在ります。彼我兩軍の戰線が如何に接近して居つたかを物語つて居るものです。

寫眞師の求に應じて一行は記念の撮影をやりました。そして表忠碑の前に再拜して山を下ります日淸戰後當時には勇猛な我第一師團は乃木少將に率ひられて赤阪山の鞍部から倚子山を突擊して三時間足らずに占領してしまつたといふ事です。結局吾等は獰猛無比な露軍の奮鬪の如何に猛烈であつたかといふ事を偲ばない譯には行かないので歸路車上の人となつて彼等の雄圖空しく消えた跡を弔ふて、一掬の涙を注がないでは居られなかつたのです。

時間がないので新市街の美術館と、物產館とをそこ〳〵に見物して五時には一同無事旅順驛頭に集まりました。斯く短時間に旅順戰跡の見學が出來たのは全く都督府の諸君の御厚情に依つたものでありました。

涼しい『暑い』講演を聽いて

―日本建築協會の八月例會―

家族の一人

×苦熱に喘ぐ八月のもなかにも、日本建築協會の例會は相變らずの元氣と緊張味をもて、月の十七日夕方から、太洋軒の大食堂を全部占領して催された。そこに、苦熱以上の熱心さが嬉しい。

×會が始まるに先つて、太洋軒調理の頗る氣持よい手輕な會食を、皆んなの打ち解けた談笑を交しつゝ催されたのは、亦一段とわたし達の心を唆つた。

×食費大枚五十錢也、それが、手輕とはいへ質と種類に於て巧妙な配合と歡待振りは、協會の眞ごころもてる苦心の程左こそと肯かれた。それに就いて端なく思ひ出さるゝは、記者が曩日京都の某青年團に神戸のカロール氏と講演を賴まれて往つたとき、同樣に當日の講演者たる奥村安太郎代議士達と共に夕餐を供せられたが、場所は例の萬養軒でも、料理は彼樣な簡素さであつた。

×奥村代議士は大層感激して、わたしが近來歐米を廻つて來た最も良い印象の一つは、何處へ行つても――公會でも家庭でも――今夕のように心盡しの料理が極めて簡素な一事である、大層らしいが、世界の大勢は斯うした事にも現はれ來てゐるといふようなことを話された。

×協會の彼樣な會食は、夕餐を攝つてゐないのを詰める、といふような平凡なものではない、まつたく、斯の世界的傾向を帶びた――左樣、内容に富むだ交歡そのものに外ならないのである。斯の會に一度び出られた方は、恐らく斯の感を深くされたであらうと想はれる。

×筆はつい脫線しかけたが、扨て心佳い會食は濟むだ、夜氣は次第に濃かとなつても、窓外は團扇

遣ふて、苦熱のほとぼりに惱むでゐるようだが、此處許りは、天井のモーターが例の氣持ちよい音を立てゝ涼風を頻りと送つてゐる、まツたく扇子のひらめきは、どの席にも見當らない。

×けれども、聽て『暑い』講演は、京大建築科の講師で神戸高工の敎授古宇田實氏によつて始められた。

『此のお暑いのに細々とお話するのも皆さんの暑いことで御座いましようから、何か涼しそうなお話を、とも思ふたのです。けれども、ほんとうに涼しいのは熱い奴を一風呂浴びるのにありまする。』心頭を滅すれば火も尙ほ涼し』てなことを云つてゐるよりも、吹と暑い奴にぶつつかツたのが、ほんとうに涼しいのです。わたしの今晩の話は、往年暑中に歐米の暑い處を歩き廻つた話ですから、謂はゞ暑さに對する一種の抵抗療法だと思し召し被下いませ』

抑もが斯ういふ調子だ。斯の輕快な氣分に引ツ込まれて、皆さんの肚裡に洪笑の涼しい風が立つたに違ひあるまい。

『シンガポール、ジヤバ、印度、此處らはご存じの通り常夏の國です。わたしは、斯の常夏の眞盛りを歩いてみました。それから巴里に着いても、倫敦に往つても、皆な夏の一等暑いときでした。大正十年には、あの風光の佳い何時も常秋の氣分もしそうな瑞西でさへやはり夏に往きました。それから更らに再び巴里の夏を見舞ひ十一年には希臘も、伯林も夏、殊に暑さの酷いといふ覺悟をもつて、スペインを見舞ひ、ついに亞米利加へも眞夏に渡つたのです』

斯ういふ前提で、會衆に吹と暑ひ思ひを一つて置いて、それから說き出す旅行談と見聞話、どうして〳〵〳〵、各國の耐熱設備や、夏季の風情抔ては足許から冷たい氣流でも浮いて來そうな建築物の話、斯うして、話は輕快な諧謔を織り込みつ興味と共に奈何にも實のある建築談に移つた、そうして、氏の將來された數々の寫眞は會衆の前に順次展觀された。何んでも本誌の口繪に出るのだそうなが、ハンガリーのドクターピカン氏の拵へたミツシヨンスタイルな住家や、伊太利中世紀の

それ抔、奈何にも神秘な暢んびりした氣分の漂ふてゐるのや、何んだか間の抜けたような裡に豪卓な氣分を偲ばせるのや、是れだけ覽ても、氏の將來された寫眞のくさぐさが奈何に珍重なものであるかを想像出來よう。

×一時間餘りに亘つた件の講演は、涼しい思ひをもて熱心に聽かれた。惜くも亦を期して當夜の講演は畢つたのである。

×併し、皆んなはそれでも席を動かない、會衆はも一つ面白いものが殘つてゐた筈だ、それは、當夜の討議題『日本建築協會の事業を今一段盛になす方法奈何』といふことである。

×講演者に對する主記の篤き謝辭が畢るや、その討議に入つた。先づ池田理事長から發言は始まつた、曰く『將來、講演や討議を公開したい、次は會員が會を中心として例會がヨリ盛になるには奈何にせば可いか、を承り度い』

×會衆の一人は立つた、曰く『要するに會員を倘ほ多く拵へるのに在る、故に現在會員の一人何倍主義を採つて勸誘されたい』

×更らに他の一人は立つた、曰く『例會のために個人の現實なる利益を受くると否とは恐らく愛會者の問題とする處ではあるまい、故に一人でもヨリ多く出席するように努めたい』

×今一人は曰つた『現に今夕のような最も有益な例會の事を各自が大いに吹聽する義務がある』之に應じて他の一人も曰つた『例會に出席するとそれ自身が互に一夕の親しい交歡である、故に斯の意義を鼓吹したい』

×『各員相互のために倶樂部的な設備をしたらどんなものであらうか』と大いに倶樂部を提唱した人もあつた。

×曰く何、曰く何と、種々の意見も出た、話もはずんだ、今一々此處に書き竭せないのを遺憾とするが、何にしろ熱心な討議は遠に愛會の念の迸りだ、と我ながら會心の笑みを禁じ得なかつた。

×それからそれへと種々な話は段々と交はされた太洋軒のボーイさん達眠むそうに山を入れる身仕度をしても、此處許りはまだ宵ひの口だ。

×美術協會と我建築家の關係奈何といふ談も段々

出た。建築は藝術であるか什うか、といふ問題は世界の文化國中、恐らく日本でだけその存在を有つてゐるようである。今日世界の何處へ往つたつてこんな事が問題となつてゐない程建築は藝術の一つたることに決まつてゐる、美術協會が萬一之を否定するようならば、我等は建築家としてのオーソチリーのために大いに問はなくてはならぬといふような議論も出たが何しろ殷な事であつた。

×建築の設計圖展覽會のようなものを年一回位開いたらばといふ意見も多くの共鳴を以て迎へられた。氣早い人達は最早その會場から種々な條件にまで話ん込むでゐるのもあつた。

×——おやッ、與へられた紙幅がもうなくなつたチエッー、書く事多くして紙足らずか、仕方はない是れで擱かう。……誰だい、擱かないと云つたツて紙が無いじやないか、と云ふのは……

— 秋 —

けふつくづくと眺むれば
悲のいろ口にあり。
たれもつらくはあたらぬを
なぜに心の悲しめる。

葉月の追憶

忘勿草

歌さま。　お別れ申しましてから二度目の夏を迎へますが貴女は其後如何御暮らしですか、矢張北海の地で……、涼しい濱風はたえず貴女を訪れてゐる事と存じます。私には此夏がわけても身に沁む樣に思はれまして、過ぐる一夏を貴女と一緒に送りましたあの涼しい涼しい濱の家をつくづく懐しく思つてゐます、私は此炎天白熱の中に生の爭闘!!とでも申しませうか、あえぎつゝ勞働を續けてゐます。誇張に過ぎる言葉かも知れませんが、私は生きてゆく事の容易でないといふ事をほんとうにしみ〳〵味つてゐます。

歌さま。ですけれど私は、働くために生れてきたものでせうか、それが嫌で嫌でたまらないとまだ考へてみた事はありません、寧ろかうして無事に働てゆけるといふ事を心から感謝したいとさへ思つてゐます。

歌さま、でも私はたつた一つ、貴女の御生活が幸福に滿ちてゐる事を心から羨やまずにはおられません。詩のような美しい御生活が　　たとへ母樣がおなくなり遊ばしたと致しましても……世間の多くの人は貴女よりもつと　もつと不仕合せです、現實の惱みに齷齪としてゐます、「私の描くものがそれが畫になつてゐようが、ゐまいがそんな事はどうでもいゝ……私は只描き得られる丈描き續けますの……」さう云つて淋しさうに微笑まれたあの大きな榎の木陰が又しても懐かしく思はれます、あそこはほんとうに涼しいでしたのね、キャンバスに向つて動かす手先さへ　ちつとも苦痛とは思ひませんでしたもの。

歌さま、それから水が美しかつたさと川の上流の

あの小さな森の中へよくゆきましたね、貴女はおぼえてゐらつしやいますか、あそこは又何といふ閑靜な處でしたでせう、二人してスケッチした、小高い丘の家は今でも私の部屋に殘つてゐます。歌さま。私はその家について最近ある、ふとした事から再び不思議な因緣？のもとに邂逅したのです御座います、私が過日訪ねて參りました家がそれが貴女と寫した家であることは誰が思ひもうけませう、つゐ此間の事でした。私の親戚の知人の方が病氣して、どうしても、私が其方を訪ねてゆかねばならない廻り合せになつたのでした、大阪の市内にある其人の家に參りましたら病後の保養旁々阿漕ケ浦の方へ行つたとの事でした、私は貴女と過した夏の事を思つてぜひ行つてみたいと云ふ氣にかられましたけれど今直ぐそんな處へ訪ねてみよう暇もありませんので遂其儘打すぎておりました。處が私はゆくりなくも半月程以前に父の鄕里である志摩へ佛事が營まれますので、父と共に參りました『途中でふと思ひついたのが阿漕ケ浦の事でした、大むかしから何となく情趣に富んだ阿漕ケ浦といふ名が私はたまらなく好きでした、それに貴女との懷しい記憶もあり、決して其方を訪れなければならぬ用事もなかつたのですけれど矢張其方も書をお描きになると聞ゐてゐましたので半分は好奇心にもかられて訪ねてみたのでした。歌さま。私はどちらの道から歩んできたものでせうか、貴方と話し乍ら歩んだ事を想つてはゐつゝもどうして其處へ出ると想像し得ませうう！、歌さま。其處は忘れもしないさと川の上流なのでした、そして私の目の前には二つの家が並でゐるではありませんか、忘れる事の出來ない家が……二人で描いた家が……しかもそれは今私が訪ねようとする家なのです、辿つてきた道こそ異れそれは正しく三年前と少しもかはらぬ風景の中に建てられた和洋折衷の家でありました、私は平凡な奇蹟……といふ事を思ひました、少なくとも私には此訪ねてきた事や、場所、又は邊りの風景、そして訪ねた其模樣を思ひますと、ほんとうに不思議としか思はれないのです、幾年か風雨に曝されたと思はれる額に此家とは不調和な凉江莊と支那

風に記された家の前に立ちました、取次に出た五十あまりの女中らしき人に、私は來意を告げましたが目的の大阪の人はもうゐませんでした、でも其婦人は懐さうに私に是非上つて話してゆけといふのです、『奥様もごんなにかお喜びになるでせう今散歩してゐらつしやいますが、直ぐにおかへりになります』私は折角來たのだから……といふ氣もあり其家に何となく心をひかれたものですから云はれるまゝに女中の後について上りました、歌さま。　私たちが噂してゐたこの家の眞相が今こそはつきりと知る事が出來ました。古い和洋折衷の此家の内部は置物や裝飾品はすつかり支那風なのです、それもふるい〳〵時代のついたもの許りです。部屋々々に掛けられた緞子のカーテン、床に敷かれた絨壇、其色こそあせてはゐますが、今も尚床しい芳香を放つてゐる様に思はれます、瑪瑙の置物、彫物をしたドス黒い朱の机、本箱にかけてある金蘭の刺繍を施した袈、さう云ふものが一として支那の古美術の讃美の的でないものはありません。あの美しい青滋の花瓶を一つ取落しても如何に高價な犠牲を拂はなければならないでせうか、伽羅の香、天井の額、滋味のある落着いた私達は矢張東洋人ですのね、其かみ王仁が敎へた美術鑑賞の氣分がまだ私達の身内に流れてゐるのでせうか、さう云ふものゝ中に立つた時、何とはなしに思慕の情が湧いてきてほんとうにやみがたき追憶の情がこみ上げてきます。

通された二階の廣間には涼しい風が流れこんできました、正面の泊の落ちた衝立に支那人特有の達筆で李白の詩が記されてあります。

峨眉山月半輪秋　影入平羌江水流
夜發清溪向三峽　思君不見下渝州

私は何とはなしに靜寂な此家にふさはしいと思ひ乍らみてゐました。さつきの老女がお茶を運んできました、私はあまりに古點のゆかない此家の様子をぶしつけとは思ひつゝも尋ねないではゐられませんでした、其人は話好きな口調で可成詳しく物語りました、丁度今から三十年程以前のお話です上海のある街に大きな骨董商を營んでゐた支那人がありました、商用のために時々渡來しては神

戸のある小さなホテルに宿泊しました、ホテルには美しい娘がありました、いつか此二人の瞳はもえてゐました、そしてお互の心をみつめる様になりました、二人は深く鴛鴦の契りを結んださうですが……男には故國に妻子がありました、女は初からそれは知つてゐたのですが其爲に醒めるような淺薄な戀ではありませんでした、が女の親がどうしてそれを默認しませう、此すべて不合理であるといふ出來事に對して兩親は心から娘を戒めました……が二人の戀は絶頂に達しました。二人は二人限りの世界を作らうと何處ともなく旅に出ました、そして旅の情緒をそゝり戀の意義を益々深からしめたのが此處なのでした、二人は救はれた様な氣持ちになつてこの靜かで邊鄙な世間と全くかけ離れたその頃はまだ山の中であつた此處に居を構へる事に定めたのでした、純支那風に建築するのは目にたつと云ふので和洋折衷といつた建物にしたのださうです、けれども內部はすつかり支那風にして男は高價な美術品を此處に運びました二人はそこでどんなに樂しい生活をしたでせう、何事をも忘れて戀の陶醉にひたりました、男はでもどうしても國へ歸へらねばりませんでした、で直ぐに又逢ふ日を約して男は歸國しました、女はさびしく愛人の來朝の日をまちましたが——

歌さま。　運命の慘虐は幸福に醉ふてゐるものゝ上にも容赦なくふりかゝつてきます、男は遂に再び女にまみえる事なしに、歸國して二ケ月とたゝないうちに病氣になくなつてしまつたのでした、女の愁嘆はも早想像する迄もありません。それはあまりに悲慘な事です、とり殘された女は自分も死なうと迄懊惱しましたが……ふと傍らの搖籃に美しい吾子を眺めて激しい悶へに苦しみました、けれども一度空に漂ひ出た魂は再び呼かへす術もありません。女は諦めがたき哀愁の胸を抱いて子供に愛の全部をつくして月日を送りました。それから二十幾年搖籃の子は二十幾つの成熟した美しい女となりました

歌さま、　今こゝの奥樣といふのがその人なのださうです。五年ほど前其母親がなくなる前やはり神戸のある貿易商の支那人と結婚したのださうで

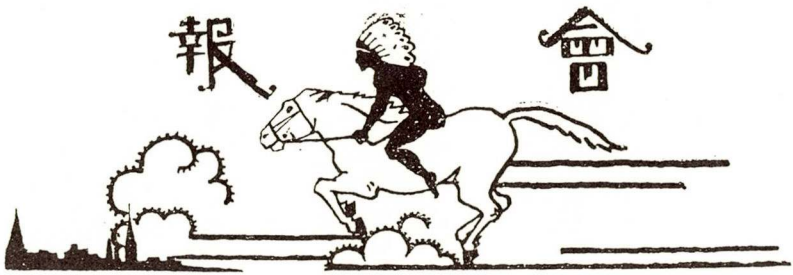
すが、病身な爲年の半ばはこの山莊で暮らしてゐられるのださうです、何といふ美しいエピソードでせうか私は匂やかにすきとつた黄色い皮膚の優艶なクラシカルな耳飾り美しい支那婦人を想像しました、そして夢みる樣な心地で窓外の流れをみつめました、ささわやかに衣づれの音がかすかに聞えてやがて優雅な香りと共に美しい夫人が現はれました夫人はにこやかに、慇懃に會釋をして私の前に腰かけられました、何といふノーブルな夫人でせう、寧ろ寂しいと思はれる位上品な支那の貴族の婦人に特有の輪廓の正しい顏！切れの長い眼に愁を秘めてゐる樣に濃い睫が深くかぶさつてゐます、そして服裝は日本の着物ではありますが、びろうどのような耳には美しい眞珠の耳飾りが水銀のように垂れてゐます。

歌さま、私はこんなに美しいと思つたひとはかつて見た事がありません、しかも其ひとは藝術に包まれた聰明な婦人なのです、私は其婦人から可成り複雜な思想問題を聞きました、それは全くおもひがけない事でしたが……又の日御話し申上げませう。大變長くなりました、つゐうかうかと筆をはしらせまして、どうぞ御身おいとひ遊ばして下さい、ではさよなら。

水にうつる磯の灯かげのまたゝきに

わかき悩を想ふ宵かな

日本建築協會々報



會報

○會務

一、來る十月下旬本協會主催第四回講習會を開催する計畫にして夫々準備中なり委細は本會雜誌十月號に發表の豫定なり

一、名譽贊助員法學博士子爵田尻稻次郎閣下八月十四日薨去、普通贊助員今村光三氏六月十日逝去ぜらる洵に哀悼に堪へず本協會より弔狀を贈呈したり

一、左記各位の頭書御住所宛にては郵便物到着せず轉居先御判明のお方の御教示を乞ふ

大阪市北區上福島北三ノ一八〇ノ五　山中宗三郎

大阪市外淀洲町南浦江五三七ノ一　上田幸三郎殿方

奈良市登大路町官舍　青木立三

兵庫縣武庫郡西灘村原田九八　木田川奎彦

大阪市南區上本町三ノ二三海老原　檜山一男

奈良市築地ノ內町二二　高田清太郎

大阪市第四師團經理部　川久保梅次郎

東成郡生野村東國分三二一　久保諫美

京都市大宮松原下ル山田大三郎殿方　平野一男

大阪市西區南堀江四ノ二八　川島甚兵衛

東京市外桐ケ谷一一五　安部成嘉

大阪市外稗島村新道九八一　坂根秋光

福岡市地行東町四番町一一二　伊藤重雄

大阪市北區西梅ケ枝町八九　五內川治三郎殿方

名古屋市宮士森町二　田原三千男　赤浦力次

會合

○理事會

△日時　八月八日午後五時三十分——八時三十分

△會場　本協會事務室

△出席者　池田理事長、舟橋理事、野呂理事宮本長理事、西谷書記

△報告　一、舟橋主計より春季大會決算報告ありたり

△議事　左の諸件協議可決せり

一、建築材料見本陳列棚廢止の件

二、八月例會に關する件

三、本協會事務所移轉に關する件

四、破損陳列戶棚賣却處分の件

五、第四回講習會開催の件

六、會員銓衡

○例會

△日時　八月十七日午後五時三十分——十

時

△會場　大江ビルヂング大洋軒食堂

△出席者　講演者古宇田實氏、副會頭片岡安氏、理事長池田實氏、理事野呂長四郎氏、佐藤彰美氏、宮本金七氏、宮本長治氏、設樂貞雄氏

會員石本喜久治氏、岩崎甚太郎氏、橘本舜介氏、近澤武男氏、岡本新次郎氏、和田貞治郎氏、谷民藏氏、武田經一氏、坪井誠一氏、長澤榮作氏、中澤誠一郎氏、山口榮作氏、小西一夏氏、小寺彌一氏、江畑幸太郎氏、朝永國次郎氏、澤原隆夫氏、木村篤一氏、下浦光衛氏、森本藤吉氏、森定松之祐氏、菅源之助氏、中村吉太郎氏、原科準平氏、芝田知重氏、

賛助員石田晴治氏

△記事　一、一同休憩所にて少時歡談に時を移し纔て六時食卓に着き夕食を共にす

一、食後暫時休憩の後例會を開始し直に議事に入り左の件に付協議の結果異議者なく可決せり

本協會事務所を堂島ビルヂングに移轉の件

本件は通信決議によれば賛一〇八否五其他七の結果を得たるものなり

一、次に宮本長理事より會務報告あり

一、右畢つて池田理事長の紹介により神戸高等工業學校敎授工學士古宇田實氏の時餘に亙る歐米視察談及感想談あり

一、次に本協會の事業としての新しき試みの題の下に討議を開始し池田、下浦、本、谷、其他數氏森の本協會發展策其他に付意見を吐露せられ快談暑氣を訝れ時の移るを知らず午後十時閉會を告げ散會したり

○新入會員

（普通賛助員）加藤與之吉君

○死去

（名譽賛助員）田尻稻次郎閣下

（普通賛助員）今村光三氏君

○住所移轉

難波停吉君　神戸市熊田内橋通五丁目六五

井上讓古君　大阪市西區鶴町四丁目七二

藤井茂美君　大阪府下西成郡玉出町六二四

服部萬次郎君　大阪府西成郡玉出町六二四ノ一

設樂貞三君　神戸市西須磨池ノ内十五

大野嘉作君　大阪市西區江戸堀南通五丁目三三

辰巳常治君　兵庫縣加古郡高砂町魚町

渡邊義三君　大阪市東區内久寶寺町一丁目二八

池田熊太郎君　大阪府下三島郡茨木驛前下中條

岡本茂樹君　大阪市西區三條通三丁目四〇

小野武雄君　東京府下中央線西荻窪字原一四六三

深澤勝久君　東京府豐多摩郡代々幡町字代々木山谷一六六

川島甚兵衛君　大阪市東區淡路町一丁目三一

青田忠時君　滋賀縣膳建築技師

山崎源逸君　東京府大森不入斗四九一

横濱勉君　大阪市北區堂島船大工町堂島アルデンク内九階九十三號室

木村得三郎君　東京市日本橋通北新堀十七大林組東京出張所内

河合貞一郎君　濱松市平田町三番地大林組濱松出張所内

○職員異動

書記山田靜吾辭任

飯村菊太郎その後任として就職

○寄贈圖書

庭園 七號 同協會
住宅 六號 住宅改良會
建築雜誌 七號 建築學會
材木新聞 每號 同社
金屬工業新聞 每號 同社
經濟資料 八號 東亞經濟調查會
都市公論 八號 都市研究會
木土建築 八號 住宅改良會
建築世界 八號 同社
工業評論 六號 工業評論社
帝國鐵道協會々報五號 同協會
建築畫報 八號 同社
國民經濟雜誌 三五卷第二號贈 文館
通俗衛生 五號 大阪府衛生會
電氣學會雜誌 八號 同學會
朝鮮と建築 五號 朝鮮建築會
工業の友 八號 工手學校
滿洲建築協會雜誌七號 同協會
建築の普及 六號 帝國工業教育會
建築業協會月報 六號 建築業協會
新住宅 八號 洪洋社
電氣評論 六號 電氣評論社
大阪市商工時報 五號 市役所商工課
工業之日本 七號 工業之日本社
名古屋工業會々報五號 同會
會報 七號 名古屋工業會
都人 第四光都人社
住宅研究 六號 文化建築社
活人 七號 同社
工政會々報 八號 工政會
柊 一號 柊會
早稻田建築學報 二號 早稻田大學建築學科敎室早苗會
日本美術協會報告 第十二輯 日本美術協會
朝鮮鐵道協會々報 第八月號 鮮朝鐵道協會
中央建築 第一卷第一號 中央建築社



役員及職員

副會頭　片岡　安
理事　池田　寛（理事長）
理事　本田　登
理事　竹腰　健三
理事　内藤　太郎（主記）
理事　設樂　貞雄（編輯）
理事　野呂長四郎（編輯）
理事　宮本　金七（編輯）
理事　舟橋　喜一（主計）

理事　佐藤　彰美
理事　園部　文雄

職員

江村　郊邨
西谷　節
清川　伊佐
飯村菊太郎
伊藤二世子

會員	二七一	會員（地方）	一〇二
名譽賛助員	七〇	終身賛助員	五五
特別賛助員	二九	普通賛助員	四八〇
合計（八月廿五日現在）		一〇〇七	

臨時博覽會部（住宅改造博覽會）

會長　片岡　安
幹事長　葛野壯一郎
常務幹事　波江悌夫
常務幹事　小笠原銅
幹事　吉木久吉
幹事　松本萬象
幹事　舟橋喜一
幹事　賴戸文吾
書記　西谷節

本誌及廣告料定價表

本誌	冊數	定價	郵稅
	一冊	七拾五錢	貳錢
	十二冊	九圓	貳拾四錢

廣告料	種別	金額
	半頁	八圓
	一頁	拾五圓
	特別頁モ料金一定シアリ御照會アリ度シ	

大正十二年八月廿五日印刷
大正十二年九月一日發行（毎月壹回一日發行）

大阪市外中津町下三番一九八番地ノ一
發行兼編輯人　江村恒一
大阪市東區内淡路町一丁目廿一番地
印刷兼印刷人　大阪活版所
大阪市北區絹笠町九
大江ビルヂング三十七號室
發行所　日本建築協會
電話北四二九一番
振替口座大阪三九九七五
大阪市西區京町堀羽子板橋北
特約販賣店　柳々堂書店
電話（土佐堀二四四〇番）
振替口座二〇八四番

第六集第九号　掲載広告一覧（掲載順）

内外木工所
島田硝子製造所
内田商事
佐倉金庫店
阿部鉄工所
瀧山商店
南満鉱業
文化工業
石綿スレート
吉岡商店
浪速貿易商会
高谷商店
山本東作商店
梅原組
服部禎商店
金剛商会大阪支店
今井硝子店

森川組
大福海上火災保険
浅海商店
出浦建築事務所
大阪建築所
新海建築工務所
小笠原建築事務所
渡辺建築事務所
葛野建築事務所
片岡建築事務所
片岡松井建築事務所
横河工務所
横浜建築事務所
竹内建築事務所
宗建築事務所
国枝工務所
柳下建築事務所

真水工務所
真水三橋建築事務所
舟橋建築事務所
遠藤於菟
木子建築事務所
設楽建築工務所
茂、野村建築事務所
岡部建築事務所
前田松本建築事務所
西原衛生工業所
砂崎
池田勘蔵
日本土木大阪出張所
大阪橋本組
大林組
竹中工務店
長瀬組

中新
佐伯工務所
野村亥之助
久保田組
熊取谷熊次郎
山本組
松村組
小西組
藤木正一
鴻池組営業所
駒井喜兵衛
安藤組大阪出張所
有山組
辰巳吉之助
清水組大阪支店
森本建築社
銭高組
清水福太郎
大阪青写真調製所

山田大理石製作所
矢橋大理石商店
須賀商会
高島屋呉服店
コルク工業
内外土木建築材料
栄進社
松尾和助本店
山本窯業商店
萩原煖房工務所
新田ベニヤ製造所
川崎工場
大野式特許品営業所
東京建鉄
河村青写真調製所
宇野沢組ステインド硝子製作所
品川白煉瓦
三枝商会
日本木材工芸

都市工業
大理石工業
ベニス工房
作田工務所
東京電気
城口汚水処理研究所大阪支店
米本栄商店
田中タイリング商会
浜口商店
日本トラスコン鋼材
大阪耐火リノリウム工業
日本ホロタイル
岩崎商業
日本工剤
小野田セメント製造
日本建築紙工大阪出張所
岡部商会
黒宮建築事務所
木下商店

下里商店
田中昌司商店
二和商会
高田商会
政正
桐田商会
大阪窯業
旭硝子
日米板硝子
関西ステインド硝子製作所
山中商会
HANKEN SEISAKUSYO
北小林酒井衛生工業部
サカイブン
積善館
筑紫商会
横河橋梁製作所
田中源太郎商店
極東板硝子工業